

書評・川合康三編 『中國の文學史觀』 二〇〇二年 創文社刊

門 脇 廣 文

はじめに

「文學史」という言葉を聞いて、われわれはそのような概念に相當する學問分野があることに、もはや何の疑問も持っていない。日本には「日本文學史」があり、イギリスには「イギリス文學史」がある。そのことを當然のこのように受け止めている。そして、われわれの専門分野である中國の文學においても「中國文學史」という學問分野があることを疑うことは、まず、ない。

しかし、この書『中國の文學史觀』はそのようなわれわれの常識に對して反省を迫る。「文學史」とはいったい何であったのか、「文學史」という概念でわれわれは何を見ていたのか、そのことについて考える切っ掛けをあたえるものだとすることが出来る。この書を讀んだ後では、教壇において「中國文學史」、あるいは「中國文學史概説」などといった講義を行うとき、ひそかに自分が今行っている「文學史」の講義とはいったい何なのだろうと考えざるを得ない。この『中國の文學史觀』は、そのような問題提起をおこなったという點で、ある意味では、日本における中國文學研究の歴史における「歴史的(?)」な書であると言ふことができる。けっして誇張ではなく、そのようにとらえるべきだと判断される。

さて、『中國の文學史觀』の構成であるが、次のような十篇の論考と三部からなる「資料編」できている。

第一章「今、なぜ文學史か」川合康三

第二章「初盛唐期における復古文學史觀の形成過程」乾源俊

第三章「文學の歴史學——宋代における詩人年譜、編年詩文集、そして「詩史」説について」淺見洋二

第四章「葉燮の文學史觀」蔣寅

第五章「母胎文學」の構想——中國の戀愛文學を手がかりに」川合康三

第六章「明治期刊行の中國文學史——その背景を中心に」和田英信

第七章『支那文學史大綱』と田岡嶺雲」竹村則行

第八章「人情の探求と小説史の構築——笹川種郎『支那小説戯曲小史』をめぐる」西上勝

第九章「林庚『中國文學史』を探る」陳國球

第十章「民間」から「人民」へ——『中國文學史』上の正統論」戴燕

資料編 日本で刊行された中國文學史——明治から平成まで

第一部 明治篇

第二部 大正・昭和戦前篇

第三部 昭和戦後・平成篇

さらに、これらに索引（人名・書名）が附けられている。十篇の論考については、のちにそれぞれ論評するので、ここでは資料編について一言述べておきたい。

第一部 明治篇には十七種、第二部 大正・昭和戦前篇には九種、第三部 昭和戦後・平成篇には十八種の「文學史」の書があげられている。そしてそれぞれの書について簡にして要を得た解説と目次が附されており、この分野への案内として貴重な情報を提供している。今後、「文學史」を研究するに際しては缺かすことのできない資料であると言うことができよう。

二

つぎに、『中國の文學史觀』の主要な部分である十篇の論考についてであるが、それは、第一章の「序にかえて」をのぞいた前半の四篇と後半の五篇の二つの部分からなっている。前半の四篇（第二・三・四・五章）は、古代中國における「文學史的思考」、あるいは「文學史的史觀」について論じたものである。そして、後半の五篇は現代日本（明治以降の日本）、および現代中國（中華民國以降の中國）の「中國文學史」の書について分析し、論評したものである。

ところで、この前半の四篇と後半の五篇の内容の差は、何を意味するのであろうか。川合氏の「あとがき」によれば、『中國の文學史觀』は、「平成八年度から十年度までの三年間にわたって行なわれた文部省科學研究費補助金による共同

研究「中國における文學史觀の形成と展開」を母胎とし」たものとのことである。そうだとすれば、本來は前半の四篇においてなされた検討がこの書の目的であったということであろう。『中國の文學史觀』というこの書の題名の意味するところが「中國の文學史觀」＝「中國における、文學の歴史についての考え方」であるとすれば、それと齟齬をきたすことはない。

しかし、後半の五篇は、そのような意味では捉えられない内容の論考である。それはむしろ『中國の文學史觀』ではなく、「中國文學の史觀」、すなわち「現代の日本や中國における『中國文學史』という書における文學の歴史についての考え方」とも言うべきものである。『中國の文學史觀』という題名はこの兩者を包み込むための苦心の作であろうが、そのことがこの書の全體としての基本方針はいったい何であるのか、それを分かりにくいものにしていていると思う。

三

この書を読んで、われわれは、何かが解決されたような感じを持つことは、おそらく、ない。むしろ、もやもやとした曖昧な氣分のなかに投げ込まれたように感ずるはずである。西洋の「近代」の概念としての「文學史」とはどのようなものか。「中國」を「方法」とした「新たな文學史」はあり得るのか。「文學」という言葉は何を意味しているのか。「史（歴史）」という言葉の意味するところは何か。近代の「行き詰まり」とは？「文學史」という言葉の定義は？「文學史的思考」とは？ 中國古典の「ジャンル」と現代の「文學史」で扱われるジャンルの関係は？「文學史」の對象とはどこまでか？

あるいは、この書の本當のねらいは、そのような問題を提起することにあつたのかもしれない。それらに關するわれ

われの疑問や疑念については、それぞれの章についての論評をもらっていただきたい。それぞれの章におけるそれらの疑問や疑念は、この書を読んでの、われわれの素朴な感想から生じたものである。そしてそこに止まっている。われわれ自身が新たな何かを提供できていないわけではない。つたない者の抱いた素朴な感想である。したがって、あるいは一笑に付されるような類のものであるかもしれない。ただ、われわれは『中國の文學史觀』が提起した問題を、眞正面から眞摯に受けとめたつもりである。そして、今後のわれわれ自身の問題として考えていくつもりである。その意味で、今回の論評は斯界に貢献するものは一點もないかもしれない。しかし、われわれ自身にとっては、われわれ自身のもっていた無意識の裡の「常識」を省みることとなったという点で、有意義なことであった。あえてこのような論評を公表するのは、そのようなわれわれ自身の問題をわれわれ自身が銘記するためのもの以上の何ものでもない。そのことあらかじめお断りしておき、各章の執筆擔當者の氏名をここに記しておきたい。

第一章「今、なぜ文學史か」 須山哲治

第二章「初盛唐期における復古文學史觀の形成過程」 宮下聖俊

第三章「文學の歴史學——宋代における詩人年譜、編年詩文集、そして「詩史」説について」 秋谷幸治

第四章「葉燮の文學史觀」 鈴木康夫

第五章「『母胎文學』の構想——中國の戀愛文學を手がかりに」 荻野友範

第六章「明治期刊行の中國文學史——その背景を中心に」 沼尻俊裕＋鈴木拓也

第七章「『支那文學史大綱』と田岡嶺雲」 關清孝

第八章「人情の探求と小説史の構築——笹川種郎『支那小説戯曲小史』をめぐる」 音羽希美＋荻野友範

第九章「林庚『中國文學史』を探る」 三枝秀子

第十章「民間」から「人民」へ——『中國文學史』上の正統論」 關久美子

四

最後に、このような「書評」を行なった経緯について一言述べておきたい。二〇〇二年にこの書『中國の文學史觀』が発賣され、「文學史」というものに興味を抱いていたわれわれは早速購入し、各自で読み始めた。しかし、個々人が別々に読んでいただけではどうしても理解できないところ、疑問の残るところがあるということで、みんなと一緒に讀もうということになった。そこで、二〇〇二年七月二〇～二一日に、国立オリンピック記念青少年総合センターで合宿を行なった。そのときの参加メンバーと、その擔當部分と氏名、およびその當時の身分は、次の通りである。

- 第一章擔當 須山哲治（當時、慶應義塾大學大學院博士後期課程二年）
- 第二章擔當 宮下聖俊（當時、大東文化大學大學院博士前期課程二年）
- 第三章擔當 秋谷幸治（當時、大東文化大學大學院博士前期課程二年）
- 第四章擔當 高橋可奈子（當時、大東文化大學大學院博士前期課程二年）
- 第五章擔當 荻野友範（當時、慶應義塾大學大學院博士前期課程二年）
- 第六章擔當 沼尻俊裕（當時、大東文化大學大學院博士後期課程三年）
- 第七章擔當 關 清孝（當時、大東文化大學大學院博士後期課程一年）
- 第八章擔當 住友磨由美（當時、大東文化大學大學院博士前期課程一年）

第九章擔當 三枝秀子（當時、大東文化大學大學院博士後期課程三年）

第十章擔當 關久美子（當時、東京學藝大學大學院修士課程二年）

このときは、① まず、擔當者が各論考の内容をまとめたハンドアウトを作成し、それに基づいて報告する。② そのあと、そのほかのものが質疑し、擔當者を含めて議論を行なう。③ 合宿後に、そのときの議論をふまえて、擔當者が原稿を作成する。④ このようにしてできあがった原稿を再度各自が読み、意見を述べる。⑤ その意見を参考にしてさらに原稿を修正する。このような段取りで検討を行い、その年の八月末に一應の原稿はできあがった。しかし、擔當者それぞれが自らの原稿に納得しきれないところが多々残っていたため、次年度再度検討することとし、二〇〇二年度にはその公表を控えることとした。

二〇〇三年の同月同日に、再度、同じ国立オリンピック記念青少年総合センターで合宿を行ない、このたびは一應できあがった原稿を元にして、前年と同じような手順で再検討を行なった。そのときのメンバーおよびその身分に、前年と若干の異同がある。ここに再度このときの参加者の擔當部分と氏名、および身分を記しておきたい。

第一章擔當 須山哲治（現在、慶應義塾大學文學部非常勤講師）

第二章擔當 宮下聖俊（現在、大東文化大學大學院博士後期課程一年）

第三章擔當 秋谷幸治（現在、大東文化大學大學院博士後期課程一年）

第四章擔當 鈴木康夫（現在、大東文化大學大學院博士後期課程一年）

第五章擔當 萩野友範（現在、早稲田大學大學院博士後期課程一年）

第六章擔當 沼尻俊裕（現在、大東文化大學大學院博士後期課程三年）

第七章擔當 關 清孝（現在、大東文化大學大學院博士後期課程二年）

第八章擔當 音羽希美（現在、慶應義塾大學大學院博士前期課程一年）

第九章擔當 三枝秀子（現在、大東文化大學文學部非常勤講師）

第十章擔當 關久美子（現在、東京學藝大學大學院修士課程二年）

その結果、前年とはその様相を全くことにした原稿ができあがった。しかし、もちろん百パーセント納得のいったものができたわけではない。先に述べたように、「文學史」の問題をわれわれ自身の問題としてわれわれ自身が銘記するた
めに、なお不十分なものはあるが、あえて公表することとしたということである。

なお、最終原稿を作成するに当たっては、第六章擔當の沼尻俊裕は現在清華大學に留學中のため、鈴木拓也（大東文化大學大學院博士前期課程一年）が修正に当たった。また、二〇〇二年に参加した高橋可奈子（第四章擔當）と住友磨由美（第八章擔當）の擔當部分は、それぞれ鈴木康夫・音羽希美が新たに最初から原稿を作り直した。さらに、音羽希美の擔當部分である第八章は、原稿の最終修正の段階で第五章擔當の荻野友範が行なった。

ともかく、以上のような経緯で今回の書評を公表することとなったが、誤った読み、不十分な理解など多々あるもの
と思う。『中國の文學史觀』の執筆をされた諸先生、およびその讀者の方々からのご批判、ご批評を賜ることができ
ば、それにまさるものはない。ご批判、ご批評のほどを、よろしくお願い申し上げる次第である。

注

(1) 川合氏は「あとがき」において「明治以後、今日に至るまでに刊行された中國文學史について、松本肇氏が獨力で調査された資料も加えた」（327頁14～15行）と述べている。しかし、資料編の目次には、第二部 大正・昭和戦前篇・第三部 昭和戦後・平成篇に「松本肇」と記されている。したがって、川合氏の言う「明治以後、今日に至るまでに刊行された中國文學史」というのは、「大正以後」のことなのであろうか。さらに、川合氏は「松本氏の原稿は確認できた中國文學史のすべてについてそ

(2)

の目次まで附載したものであったが、あまりに膨大な量にのぼるために、今回は目次の部分は割愛せざるをえなかった」と述べる。しかし、解説の書かれている書については、すべて「目次」が記されている。「割愛」した「目次」とは何であったのか、よく分らない。

厳密に言えば、第五章「母胎文學」の構想も、異質な章である。このことについては、第一章・第五章の論評で論じられるはずである。

第一章 川合康三著「今、なぜ文學史か——序にかえて——」

須山 哲治 評

一 はじめに

川合康三編『中國の文學史觀』は、從來の中國文學史に對する見方・態度について疑問を提示し、「これまでの方法論では見えてこなかった中國文學の現象を捉えるためには、新たな文學史觀を作り出す必要がある」ということを提唱した、大變意欲的かつ刺激的な内容をもつ。特に川合氏の手による第一章は、全體のまとめともいうべき部分で、本書が編集された所以、言い換えれば、現在の中國文學史觀にはどのような問題があるのかということについて、簡潔に述べられた最も重要な章である。いわば、本書の中核といっても過言ではあるまい。

第一章は、四つの節（一 「中國文學史」の誕生、二 歴史觀の問題、三 文學史成立の要件——持續性・個性、四 中國における文學史的思考）から構成される。以下、テキストの順を追って、節ごとに著者の主張をまとめていき、最後に第一章全體に對して評者の觀點から疑問を提示することとしたいが、まず最初に、第一章の内容を、節ごとに簡単に要約しておきたい。

第一節では、「文學史」が西歐近代思想の産物であり、百年ほどの歴史しか持っていないことを論じる。第二節では、西歐近代の文學と中國古代文學とを、特に歴史觀の觀點から比較し、中國文學に獨特な思考である「下降史觀」と「均

質性」について説明する。第三節では、文學における均質性（時代性）と個性の關係について論じ、均質性も個性も、文學史が成立するためには缺くべからざるものだが、一方で極度の均質性や強烈すぎる個性が、文學史成立を困難にすることもあると説く。第四節では、中國独自の文學史的思考の存在について言及し、それを明確化するための文献・資料について述べる。

二 第一章の要約

第一節 「中國文學史」の誕生

川合氏は本節の冒頭において、「中國文學」と「中國文學史」の歴史の長さの違いについてまず指摘する。『詩經』から数えれば約三千年、魯迅が「文學自覺の時代」といった魏晉の時期から数えても千八百年の歴史をもつ「中國文學」に對して、「中國文學史」の方は、世界最初の中國文學史であるとして一般にいわれている古城貞吉の『支那文學史』（一八九七年）から数えて、わずか百年の歴史しか持たないというのである（3頁1～5行）。

續いて氏は、一九世紀末に中國文學史の著作が突然陸續と出版されたことを挙げ、その理由を、西歐近代思想と關連づける。つまり、一九世紀の西歐において近代歴史學が確立し、そこから文學史が發生したと説くのである（4頁8～12行）。

氏は、西洋文學史の成立が日本における日本文學史の誕生に多大な影響を與えたことに觸れ、この動きが更に、日本

における中國文學史、中國における中國文學史の確立へとつながっていったことに言及したあと（4頁13行～8頁14行）、本節最後で以下のように述べている。「中國文學史はわずかこの百年の産物であって、中國古典文學の長い歴史の中ではごく最近のことに過ぎず、近百年の目でもって二千年を超える過去を捉えているということである。」と（8頁15～17行）。この一文こそが、氏の問題意識の根幹となるものであり、本書を貫く主張の出発点となっていると言つてよいであろう。

第二節 歴史觀の問題

「近代が作り出した『文學史』という装置を使って、それ以前の長い時代を扱おうとすることは、多くの不適切な事態を生ずることになる。」と、本節冒頭で川合氏は指摘する（9頁1～2行）。「不適切な事態」とは、具體的にはさまざまなものを想定しうるが、⁽¹⁾その中で氏が特に重要と考えているものに、「西歐と中國の、文學における歴史觀の相違」がある。本節では、このテーマが中心として取り上げられている。

西歐近代が、人類の歴史を近代に向かって發展（上昇）する過程として捉えようとする、いわば「上昇史觀」とも言うべき歴史觀をもつのに對し（9頁15行以降）、中國においては、歴史を、古代の理想的時代が次第に下降し、衰退していく過程として捉える「下降史觀」が、傳統的歴史觀であった⁽²⁾（10頁9行）、と川合氏は指摘する。この差異が、文學史觀においても同様に見られるというのである。

更に氏は、古代中國の場合、「下降史觀」とは全く異なる時間意識も見られるということに言及する。すなわち、「通時的な文學の因襲を、共時的な文學環境として捉える」という見方である（13頁11行）。張戒、嚴羽、錢鐘書、文天祥、

杜甫、袁枚などを例に挙げて説明がなされているが、その要諦は、「時代による文學の變化については認めるもの、そこに發展や衰退などの價值觀を認めない」という事であろう。

このような時間意識が古代中國において誕生した理由について、氏は二つの理由を挙げている。一つは、「中國の文學においては、西歐のそれと比して、文學史的因襲が驚くほど均質に持續したから」（14頁10行）である。もう一つは、「古代中國にあつては、作者と讀者、創作と批評が分化していなかったから」という理由であるが、これを言い換えれば、読み手が同時に書き手であるために、時代による展開が自ら表現する際の手法として受け止められるためである（15頁1行）。

文學史の記述に際しては、もっぱら各時代による差異の方が注目されるが、このような均質性は、決して無視できない特徴である、と氏は本節の末尾で指摘している（16頁13行）。

第三節 文學史成立の要件——持續性・個性

川合氏は第二節の最後において、中國文學の均質性（一貫性・持續性）がもつ重要性について觸れている。本節では、この「均質性」と、それとは相對する概念である「個性」が主たるテーマとして取り上げられている。

氏によれば、中國の場合、文學における均質性が、西洋に比べて非常に長い期間にわたって存在したという點が特徴的だが、（17頁5行）その理由は、西洋の文學が「個性」の突出を價值の據り所とするのに對し、中國の古典文學は、個性の突出よりも文學の軌範を實現することを志向したからである（17頁14行）という。

また、文學史が成立するためには、特定の文化圏において文學が一貫性を持っていなければならない、と氏は指摘す

る（16頁18行）。この観点から見れば、中國文學は文學史を持つ資格が優にあるのだが、しかし一方で、あまりに均質であったとしたならば、文學史を考えることは不可能になる、とも言う。つまり、「中國の文學はその持続性によって文學史を可能にし、同時にその均質性によって文學史を困難にしている」のである（17頁9～13行）。

續いて、文學史における「個性」の問題が論じられる。川合氏は、文學史成立にとって、「個性」という概念が必要条件となっていることを述べたあと（19頁7行）、非常に重要な指摘をする。それは、文學史における「個性」には、「個々の文學者における個性」と「時代ごとの文學がもつ特性」、すなわち「時代の個性」とがあるが、「個々の文學者における個性」が「時代の個性」を決定しているとは言えない、という事である（19頁9～14行）。

氏は、東晉・宋の代表的文學者である陶淵明が、『文選』にその作品があまり多く収録されておらず、『文心雕龍』においては全く言及されていないことを例に挙げ、時代の顔とも言うべき文學者は、その時代を代表する文學（「時代の個性」）とは位相を異にするところで文學性を發揮していたといえる、と述べている。文學の歴史は、creative minority によって作られているというのである（19頁15行～20頁4行）。

これまでの文學史は、各時代の傑出した點と點、すなわち「個々の文學者の個性」同士を結びつけることに熱心であった。しかし一方で、無名の文學者によって作られていた「時代の個性」というものを無視してよいはずがない、と川合氏は主張する。それを再現することは不可能に近いほど困難かも知れないが、少なくともそうした個性に對して目は向けるべきであろうし、「文學者の個性」と「時代の個性」を安易に重ね合わせることはできない、と言うのである。（20頁5～13行）。

第四節 中國における文學史的思考

文學史は西歐近代の産物ではあるが、過去の中國においても、「文學史的な思考」は存在した、と川合氏は言う（22頁8行）。ただし、近代以降に成立した文學史では、時代を代表する文學、または文學の展開の跡を追跡するような特徴を持った文學が高く評價されており、變化する相に注目して取捨選擇の判斷がなされているのに對して、中國古代の文學史的思考は、文學とはかくあるべしという軌範に合致した文學が評價されており、不變の軌範を判斷の根據としている點が、大きく異なっている、と言うのである（23頁6～10行）。

また川合氏は、このような中國古來の「文學史的思考」は、決して容易に探求できるものではないと考えているようである。近代以降の文學史のように、「文學史」という名稱を冠する書物によって秩序ある形で提示されている譯ではなく、従って非系統的斷片的な資料しか存在しないからである。（23頁11～13行）。では、どのような資料に基づけば、中國古來の「文學的思考」と探り當てることができるのだろうか。川合氏は、以下の四つを挙げる（23頁14行～24頁11行）。

- 一、詩論・文論・詞論などの文學論の著作
- 二、正史の文苑傳、ないしはそれに類する傳
- 三、總集の類
- 四、「無言の文學史」、「無形の文學史」

本章第二・第四章が、「一」を題材に使った具體的な研究の例であり、更に第二章は、「二」も研究對象に取り入れて

いると言えよう。

「三」と「四」については、多少説明を加えておく必要があるかもしれない。川合氏は「三」の總集の類について、「ある期間の文學作品を選び出した總集には、作品選擇の判斷の中に當然、その期間の文學史をいかに捉えているかという編者の考えが間接的に示されている」と解説している（24頁2～4行）。これを對象とした具體的な研究例が、本書第三章である。

「四」について氏は、「或る時代に生産された無数の作品、その中のどれが次の時代にのこり、どれが消えていくか、そこには偶然の要素、外的な要因以上に、人々の無言の選擇が働いていたはずである」とし、その無言の選擇が積み重なったものを、「無言の文學史」と名付けている。氏は、これを摘出して示すことは難しいとしながらも、今後の考察にはそうしたものにへも視野を廣げていかななくてはならない、と述べている。本書第五章は、この「無形の文學史」を探り當てようとする具體的な試みであると捉えることができよう。

最後に氏は、以下のような提言をし、稿を締めくくっている。「二十一世紀に入った現在、西歐近代の作り出した概念はあちこちで揺らぎだしている。文學史觀も近代の文化全體の動きと連動して生まれたものであるならば、文化全體が大きく變容しつつある今日では、そのまま通用するとは思われない。今日には今日の新たな文學史觀が求められるだろう。（後略）……」（25頁1行）これこそが、川合氏がもっとも力説したかった部分であり、本書が編集されたそもそのきっかけも、この「近代への懷疑」と「新たな文學史の探究」にあったのであろうと、評者は考えるのである。

三 第二章以下との関連

ここで、本章と本書第二章以降との関連についてまとめておこう。

川合氏は本章で、「近代的中國文學史觀からの脱却」をするための方法論を幾つか提唱しているが、それらを大まかに分類すると、以下の二つにまとめることができるかと思う。

- 一、近代的中國文學史觀成立以前の、古代中國における文學史的思考の探究
- 二、明治期日本を中心とした、初期の中國文學史の論著の研究⁽³⁾

「一」は、中國文學における近代的文學史觀を相對化するために必要な作業であり、この方法論に則って具體的な事例を對象に行った研究が、本書第二・三・四・五の各章である。これに對して「二」は、西洋近代思想と、その影響下に成立した文學史觀そのものを明らかにしていく作業といえよう。本書では、第六・七・八の各章が、その具體的な事例研究である⁽⁴⁾。

四 評價

最後に、本章の内容に對する評者の意見を述べたい。

冒頭ですでに述べたように、本書は、従来の文學史觀、すなわち西歐近代的文學史觀に異を唱え、そこから脱却することを提言した書物であるといえよう。川合氏の言う、「二十世紀に入った現在、西歐近代の作り出した概念はあちこちで揺らぎだして」おり、「文學史觀も近代の文化全體の動きと連動して生まれたものである」以上、「今日には今日の新たな文學史觀が求められる」であろうという提言（25頁1〜3行）は、誠に當を得たものであると評者は考える。

西歐文學においては、このような提言自體は、もはや決して目新しいものとは言えないのかも知れない。例えば、一九六〇年代以降に興った構造主義批評は、いわゆる「西歐近代思想」と、それに基づいた文學觀を脱却しようとする試みであったといえよう。文學における「差異」や「共時性」が重視され、文學に對する歴史的な觀點を排除する結果をもたらしたのである。あるいは、一九一〇年代に起り、構造主義批評に影響を與えたロシア・フォルマリズムや、それよりやや遅れて一九二〇年代にアメリカで流行した新ニュー・クリティシズム批評なども、近代的な文學觀を否定する動きであったと總括することが出来るよう。

一方で、我が國の中國文學研究においては、このような試みはほとんどなされることがなかった。評者の管見の限りでは、本書が、少なくとも本格的な試みとしては最初のものである。本書のもっとも評價に値する點は、この事である。と評者は考える。本書が上梓された以上、もはや我々中國文學に携わる者は、西歐近代思想に對して無自覺であることも、無自覺を装うことも許されるわけにはいくまい。

しかし一方で、評者は、本書の内容に對して全く不満を感じていない譯でもない。以下、評者が考える本書の問題點を、特に第一章の内容を中心に、簡潔に述べておきたい。

その問題點とは、以下の三つにまとめることが出来る。

一、具體的な文學史の不在

二、方法論や研究對象が必ずしも適當とは言えない

三、近代的文學史觀の定義付けが曖昧

まずは、「一」の具體的な文學史の不在について述べたい。

川合氏は第一章の中で、西歐の近代的文學觀・文學史觀と、中國の傳統的文學觀・文學史觀についての比較を行い、幾つかの點において、その相違を明らかにしてはいる。しかし、その結果、新たな文學史觀に基づいて中國の文學を捉え直した、具體的な文學史像を示しているかという点、それについては、全く言及されていないと言ってよい。

文學史觀や文學史と、そこに内包される具體的な文學との關係は、抽象化して言えば、「價值觀」とその價值觀によって判斷される「現象」の關係と捉えることができるであろう。川合氏の提唱する「近代的文學史觀からの脱却」とは、言うまでもなく、文學（この場合は中國文學）に對して近代的人類が所有していた「價值觀」を變動させるということである。「價值觀」を變えることによって、これまでは見ることの出来なかつた中國文學の諸現象を明らかにせんとする試みである。

これまで長い歴史の中で、人類は、些末なものも含めれば何度も「價值觀」の變革を繰り返してきたと言ってよいだろうが、その流れを抽象化してみると、おおむね以下のような循環を繰り返していると思われる。

(1) 「價值觀」と「現象」の不一致（解釋不能性）が問題になる

- (2) 新たな「價值觀」が提唱・検討・決定される
- (3) その價值觀によって、「諸現象」が解釋される
- (4) 再度解釋不能な「現象」が現れる

「西歐近代の作り出した概念はあちこちで揺らぎだして」いるので、「今日には今日の新たな文學史觀が求められるであろう」(25頁1〜3行)という川合氏の提言は、敢えて挑發的な言い方をすれば、前述の(1)と、(2)のごく一部(新たな「價值觀」の必要性の提言)に相當するに過ぎないのではなからうか。新たな「價值觀」の具體像を提示することもなければ、その「價值觀」によって中國文學を解釋し直し、近代から脱却した文學史を示すこともない。

「新たな價值觀が必要である」という提言は、我々が文學に關する既存の「價值觀」に疑問を抱いているか否かに關わらず、それだけでは意味があるとはいいがたい。多くの人にとっては、「どのような價值觀が必要なのか」、「その價值觀に従えば、文學をどのように捉え直すことが出来るのか」について述べられて初めて、新たな「價值觀」を説得力をもって受け入れることができるはずだからである。つまり最も重要なのは、前述の(2)と(3)の部分ということになるが、本章では、この點について觸れられることがあまりに少ないように思われる。

さらにもっと大きな問題もある。前述のように、川合氏は本章25頁で、西歐近代的文學史觀は、今日そのまま通用しないと述べている。しかし、具體的な點、すなわち、「どのように通用しなくなっている」のかについては、ほとんど觸れられていないのである。西歐近代的文學史觀の限界を、具體的且つ相對的に論及して初めて、氏の提言は實效性・現實性を帯びたものになるのであろうが、本章ではそこまで深い議論がなされていないように思われ、その點が残念である。

以上のことをまとめると、第一章の問題點は、「近代的文學史觀の限界性」、「新たなる文學史觀の具體像」について述べられていないために、「新たなる文學史の具體像」が明示されておらず、その結果、説得力に缺けてしまっている、ということになるかと思う。

續いて、「二」の「方法論・研究對象が必ずしも適當ではない」について述べたい。

評者は前段で、本章では「新たなる文學史の具體像」が述べられていない、と批判した。これに對して、以下のような反論があるかも知れない。「なるほど文學史の具體像に對しては言及されていないかも知れない。しかし川合氏は本章第四節で、中國古來の文學史的思考を明らかにするための研究材料を四つ挙げ、方法論を示している。また、それに則って研究した成果が本書第二・三・五章であり、これらは全て新たなる文學史の具體像といえるのではないか」と。確かに川合氏は、本書23頁11行目以降で、中國の文學史的思考を明らかにするための材料として、「詩論・文論・詞論など」、「正史の文苑傳」、「總集の類」、「無言・無形の文學史」の四つを擧げている。また、第二・三・五の各章で、これらの材料が使われていることは、すでに評者が論じた通りである。

しかし、これら各章で示された方法論や研究對象について、評者は少々懷疑的にならざるをえない。詳しい論評については、第二・三・五章を擔當する評者に任せたいが、これら三つの章における論證の過程、使用されている史料や用語、結論を見る限りでは、結局は近代的文學史觀という土俵の上で、これまでとは多少決まり手の異なる相撲を取っているに過ぎないのではないか、と評者には思われるのである。その理由について、評者は以下のように考える。

第二・三・五章は、中國古來の「文學史的思考」を具體的に採らんとする試みであり、それを明らかにすることによって、恐らくは西歐近代の文學史觀を相對化することを最終的な目的としているであろうことについては、本稿の「三

第二章以下との關連」においてすでに述べた通りである。西歐近代の文學史觀を脱却し、新たなる文學史觀を生み出すためには、その前段階として、脱却の對象となる西歐近代の文學史觀を、今一度客觀的に捉え直す作業が必要となるはずなのであって、第二・三・五章における研究も、いわば近代からの脱却という大舞臺を成功させるための準備活動の一つと捉えることができよう。逆に言えば、第二・三・五章をこのように捉えなければ、第一章で川合氏が述べる「今日には今日の新たな文學的史觀が求められる」(25頁1〜3行)という本書最大のコンセプトと、二・三・五章の研究内容との間に、有機的な繋がりを見出せないのである。

ところが、翻って第一章を良く見ると、川合氏は、中國古來の文學史的思考について、それが西歐近代の文學史觀と如何に異なるかということ述べるばかりで、それを如何に抽象化していき、どのような方法論に基づけば、西歐近代思想に基づいた文學史觀を相對化できるのかということについては、實は全く觸れていないのである。

更に言えば、中國古來の文學史的思考を収集・抽象化することによって、西歐近代の文學史觀を抽象化できるかも知れないという可能性についても、實は全く言及されていない。ただ無自覺に中國と西歐の文學史觀を對比し、相違點を列挙しているに過ぎないのである。

このような態度が、具體的な研究である第二・三・五章にも現れているために、上述のような、「近代を脱却していない」との印象を抱くのではないだろうか。

川合氏の手による第五章を例にとって考察を加えてみたい。この章で川合氏は、今日残されている文學作品は、儒家の理念に合致するとみなされたものに限られ、その背後には更に膨大な作品群が控えていたのではないかと考える(154頁6行目)。そして、その背後に控えていたと考えられる文學の全體を想定し、それに「母胎文學」という名を付けるのである。その「母胎文學」の痕跡を明らかにしようというのが、第五章の内容である。

しかし、この章で探究された「母胎文學」なるものは、中國文學における一つの「現象」にしか過ぎないのでなかろうか。「母胎文學」そのものは、決して「文學史」とは言えないと、評者には思われるのである。なぜならば、「文學史」とは様々な文學現象を何らかの價值觀によって意味づけ秩序化し、並べたものでなくてはならないからである。現象を示すだけでは、文學「史」とはなりえないのである。

あるいは氏の頭の中では、このような「母胎文學」という文學現象を積み重ねれば、新たな「文學史」が見えてくるという青寫眞があるのかも知れない。しかし、その可能性について第一・五章を通じて全く觸れられていないというのは、やはり問題であろう。どのように積み重ねればよいのか、そもそも積み重ねることによって「文學史」となりうるのかについては、不明のまま棚上げされているのである。

更に付け加えれば、第五章に止まらず、本章第二章以下の各章は全て、實は近代的文學史觀を脱却した新たな文學史觀を提示している譯では決してないことに注意すべきである。

第二章以下の研究對象が、「古代中國における文學史的思考の探究」と「初期の中國文學史の論著の研究」とに大別されることについては、すでに評者が論じた通りである。では、この二つを研究對象とする目的は、果たして何であろうか。この二つを研究對象にすることによって、何が解明されるのであろうか。

前者については、「古代中國における文學史的思考」を明らかにすることによって、西歐近代的文學史觀を相對化することを目的としていると考えられる。後者については、中國文學に對する近代的文學史觀そのものの姿を解明しようとすることを目的にしているのであろう。

しかし、これらが解明されることで、果たして近代的文學史觀を脱却し、新たな文學史觀を生み出すことが可能なのであろうか。假に可能だとして、一體如何なる方法論に従えばよいのだろうか。川合氏はこれらについて、全く言及

してはくれないのである。これらを曖昧にしたまま第二章以下のような具體的研究を行ったところで、結局は、近代的思考の枠組みを多少擴大したに過ぎないという結果に終わってしまうのではないだろうか。

では、なぜ以上のような問題が生じているのだろうか。その根本的原因について考えてみたい。

それは結局の所、川合氏の提言の根本に横たわるはずである、「西歐近代の文學史觀とは何であるのか」という疑問が明らかにされていないためなのではないだろうか。すなわち、「三」で述べた、「近代の文學史觀の定義付けが曖昧」であるという事に端を發していると、評者には思われるのである。以下、これについて論じたい。

すでに述べたように、川合氏は本章を通じて、西歐近代的文學史觀と中國傳統の文學史觀との比較を行っている。しかしそれらはいずれも、ある部分部分における相違について述べているばかりで、近代的文學史觀そのものについて、それが一體どのようなものであるのかを明らかにしてはいない。

その事は、第一章の「そこには文學史の基盤となる史觀が、尙古か進化かという對蹠的な相違をはじめとして、さまざまな違いがあるだろうが、今一つを記せば、評價の基準の違いがある（23頁）」という氏の言い方に、端的に表れている。問題は、西歐近代と中國古來の文學史觀における「さまざまの違い」とは具體的には何なのか、それらを抽象化するとどういう事になるのか、ということのはずである。それが明確になって初めて、我々は、西歐近代文學史觀というものを總體として捉えることが出来るのではなからうか。この作業なくして、西歐近代の文學史觀と中國古來の文學的思考とを相對化することも、近代的文學史觀から脱却を圖ることも、新たな文學史觀を生み出すことも、可能だとは思われない。

近代文學史觀について明確な定義付けがなされていないというのは、本章だけに見られることではない。具體的な文

學現象を對象に行った第二章以下の研究に對しても、程度の差こそあれ、同じことが言えるであろう。西歐近代の文學史觀に對する總體的な把握がないゆえに、各論ともに新たな文學史觀に對する觀點が曖昧なものとなってしまうのである。これこそが、本書全體を通してみられる根本的な問題であると評者は考えるが、これについての詳細は、第二章以下の擔當者の言を待つことにしたい。

川合氏は本書の「あとがき」において、「文學史觀にはまだ多くの課題が残されているにしても、今日の時點で到達しえたところをとりあえずは刊行して、今後の更なる研究に資することができればと願う」(328頁1〜2行)と述べている。本書の著者達の更なる研究に期待すると共に、氏の提言に對する議論が、斯界全體において活發になされることを待ち望んで止まない。

- (1) 西歐近代思想の基に誕生した文學史という概念を日本文學史に適應した場合に發生する不具合の例として、丸谷才一が、「日本文學史を見わたす」(『丸谷才一批評集 第一卷 日本文學史の試み』文藝春秋 一九九六年)において述べた説が引用されている。丸谷氏は、以下の七つの問題を列挙している。一、近代國家を基準とした見方では日本の長い歴史を扱えない。二、ナショナリズムに基づくために他國との關連を見落とす。三、民主主義の時代ゆえに宮廷文化を評價できない。四、個人主義の時代ゆえに様式が優先する古典を捉えきれない。五、寫實主義の立場では日本の文學は理解しえない。六、生活と未分化の文學を純粹な藝術として捉えようとすると理解を誤る。七、「進歩」という觀念にとり憑かれた立場は、過去の文學を扱うのに不都合である。川合氏は、以上の七つの問題はほぼそのまま中國文學史にも當てはまる、という。(9頁2行目〜10行)
- (2) ただし、中國は「下降史觀」に當てはまらない歴史觀も存在しなかった譯ではないと、川合氏は補足している。例えば、清の趙翼に見られる「今の方が古よりまさるとする認識」や、劉禹錫に見られる「歴史は波狀に起復を繰り返すものだと思ふ」

史觀（反復史觀）などは、その例であるとする（10頁12行～11頁9行）。しかし、中國においては、基本的には「下降史觀」が支配的だったのであり、それは西歐近代の「上昇史觀」とは正反對のものであった、と氏は位置づけている（11頁10～12行）。なお、明治期の中國文學史に對する研究については、川合氏は第一章の中では全く言及していない。従って「二」については、本書第六章以下の内容から、評者自身がまとめたものである。「二」は本書の内容の半分を占めているが、これについて川合氏が本章で全く觸れていないのは、些か不可思議であると評者には感じられる。詳論は他の評者に譲るが、本章前半部（第五章まで）と後半部（第六章以降）との間に見られる明白な溫度差は、川合氏のこの態度とも關係があるのではないかと考えるのは、多少穿ち過ぎた見方であろうか。

（4） 中國人研究者の手による第九・十章も、近代初期に中國において成立した文學史を對象とした論考であり、この點では第六・七・八章と全く同様と言ってもよいが、しかし、「近代的中國文學史觀に對して好意的であり、基本的に懷疑を抱いていない」という點で、他の章（ただし、同じ中國人研究者の手による第四章を除く）と決定的に異なっている。川合氏は「あとがき」の中で、「私たちの研究がいわば『近代への懷疑』から出發しているのに對して、中國においては二十世紀の總括として肯定的に捉えられているなど、基本的な態度に興味深い相違が横たわっているかに思われたが、文學史・文學史觀について強い關心が日中兩國で同時に生起していることは確かであり、これが極めて今日的な問題であることを示している。」と述べているが（325頁）、如何せんこの二章の内容は、第一章で提唱されている本書のコンセプトに沿ってはいないのであり、このことはやはり問題視されてしかるべきではなからうか。

第二章 乾源俊著「初盛唐期における復古文學史觀の形成過程」

宮下聖俊評

—

乾氏はこの章において、「復古文學史觀」の「初盛唐期における形成過程」を追っている（31頁4行）。そしてその際の「問題把握の要點」として乾氏が擧げるのは、「復古の主張が唐朝の政治理念と關與し」つつも、それが統治者からの發言としてではなく、「それを唱えるひとの出身の問題と絡んで、従來の支配的な勢力に對抗しようとの意圖のもとに發せられている、ということ」とのことである（31頁5～7行）。また、復古の主張が唱えられるときに、「何を述べているかということよりも、どのように機能しているのかという觀點」から考察している、と乾氏は述べる（59頁13～14行）。

以下、まず乾氏の主張を、その内容を明確にするよう要約してから、その批評を行なう。なお乾氏の論文は次のように節が立てられている。「はじめに」・「一 陳子昂「修竹篇」と「序」、及び盧藏用「陳氏集序」」・「二 李白「古風」五十九首（其一）」と李陽冰「草堂集序」」・「三 殷璠「河嶽英靈集序」と杜確「岑嘉州集序」」・「四 まとめと課題」

「はじめに」

乾氏はまず、初盛唐期に復古文學史觀を主張した人々のその當時における勢力を、現在の我々は過大に評價してしまっているのではないか、という問題を提示する（31頁1～3行）。そのうえで、この章における目的は「復古文學史觀」が「初盛唐期」においてどのように形作られていったのかを追うことにある、と述べる（31頁4行）。そしてその際の「問題把握の要點」として乾氏が挙げるのは、「復古の主張」が、「それを唱えるひとの出身の問題と絡んで、従来の支配的な勢力に對抗しようとの意圖のもとに發せられている、ということ」とのことである（31頁5～7行）。また、その論の展開の仕方としては、「盛唐に至る過程で、復古文學史觀が理論の面でどのように整理されてゆくかということに焦點を絞る」と述べている（31頁7～8行）。

乾氏はその結論を「當時支配的な勢力であった舊來の貴族層による政治、文學における主導權」を「理論のうえでみずからの屬する新興の一派に歸せしめようとの意圖のもとになされたものであると思われる」と述べる（30頁12～14行）。「新興」の勢力とは科擧出身者や、「制擧」と呼ばれる臨時の試験出身者のことである。つまり「復古の主張に與するひとびと」がそれまでの「文學觀」や「文學史觀」を批判するのは、そこに「出身階層」という問題が絡んでいるのだと、乾氏はいうのである（30頁11～12行）。

そして、「復古の主張」とは、從來の支配的な勢力に對抗しようとの意圖により、唐初に編纂された史書（具體的に

は『周書』王褒庾信傳論)に示された「文學史記述」を、自分たち新興勢力に有利なように取り込み修正することで形づくられていったのではないか、というのである(56頁9〜10行)。

以上のことについて、乾氏は以下の節で具體的に論じていくのである。

その際乾氏が前提としている、唐初の史書に示された文學史記述のとらえ方は次の通りである。それは『周書』王褒庾信傳論の記述に表れている、という。そこには、『漢書』藝文志詩賦略の枠組み、すなわち儒家的な價值觀を絶對的なものと見なし、それに合うか合わないかで文學の價值を判斷する見方に依り、文學を衰退の歴史として捉える「下降史觀」が示されている。しかしながら、それとは逆に『宋書』謝靈運傳論の文學のとらえ方、すなわち各時代の變化に應じて文學も變化するものだという、變化を重視するという考え方にも基づくことによって、新たな「文學史」が構成されている。このように構成された新たな「文學史」とは、實は北朝系王朝である唐朝の正統性を主張するために意圖的に構成されたものである(31頁9〜17行)。以上が乾氏が前提としているとらえ方である。

「一 陳子昂「修竹篇」と「序」、及び盧藏用「陳氏集序」

この節の要點は、盛唐に至る過程で復古文學史觀が理論の面でのように整理されていくか、ということである。具體的には陳子昂の「修竹篇」と「序」、そしてその評價を決定づけた盧藏用「陳氏集序」をもとに論述している。

乾氏によれば、陳子昂の「修竹篇」とその「序」とは、自分の詩作品における試みを正當化するために、唐初の史書(『周書』王褒庾信傳論)に示された文學史觀のふたつの面のうち、主に『漢書』藝文志詩賦略にみられるような儒家的價值觀をもとにした「下降史觀」を取り込み(34頁6〜7行)、自身の作品の文學史上の意義を述べたものである、と

いう(37頁10～11行)。ただしこれは、當時における一般的な「形式」にのっとった作品のひとつとして書かれている以上、當時の修辭一般に對する直接的な批判となりうるほどの變革ではなかった、と乾氏は判斷するのである(37頁12～15行)。

そのように、自分の作品のひとつを正當化するという意味合いが強かった陳子昂の主張を、盧藏用は「陳氏集序」で文學史全體のなかに位置づけ(39頁15～17行)、「文學の衰えをひきうけて正す陳子昂という圖式」をはっきりと示した(41頁6～7行)、と乾氏はいう。そして乾氏はさらに、その際の特徴として、『周書』王褒庾信傳論の記述をより簡略にし、「下降史觀」によってすっきりとまとめられている、という(40頁2～4行)。また、庾信らを斷罪する見方に乗って、それを承ける上官儀を名指して批判していることから、この文學史觀が當時の主流をなす勢力に對抗する意圖をもって書かれていることがはっきりと顯れている(40頁5～6行)、と乾氏は判斷し、このような「陳子昂の文學に對して盧藏用がなした文學史上の評價は、開元、天寶期に多くの贊同者を得る」のである、とまとめる(42頁15行)。

「二 李白「古風」五十九首(其一)と李陽冰「草堂集序」

この節の要點は、前節で言及した初唐における復古文學史觀が盛唐にどのような繼承されたのか、ということである。具體的には李白の「古風」五十九首(其一)と李陽冰「草堂集序」をもとに論述している。

乾氏はまず、李白の述べる文學史の基本的な流れは、「盧藏用序の認識とおなじである」とする(44頁7行)。そうである、李白の主張では、「大雅」を絶對の價值とすること、『漢書』藝文志の論理すなわち儒家的價值觀をもとにした「下降史觀」が用いられている、と判斷する(44頁8～9行)。さらに乾氏は、李白が唐初に編纂された史書(『周書』

王褒庾信傳論) において理想とされていた文質斌斌たる文學が具現した、と李白が述べていることに注目して、「從來の文學が「文」ばかりであるのに、自分たちがそれに「質」を加えた」との主張だと見なしている(45頁6〜8行)。

また乾氏は、李白が「自分の生きるこの時代の文學についての見方」を述べていることに注目する(44頁16〜17行)。李白の見方では、盧藏用が陳子昂をひきあいにして、「主流に對抗するために打ち出した文學史觀」すなわち復古の文學史觀が、李白の時代には「それを信奉するひとびとの盛んな登用というかたち」で實現されている。そして、それを賞賛するかたちで、李白は「自分の生きるこの時代の文學についての見方」を述べているのだ、と乾氏は判断しているのである(45頁11〜13行)。

そして李陽冰は、李白の文集序を書くにあたって、家系から出生の經緯、出仕へと至る人生の閱歷を記している。このことを乾氏は「復古的文學史觀がやはりここでも身世の問題と絡んで述べられたと受けとることもできる」と判断している(46頁9〜10行)。

「三 殷璠「河嶽英靈集序」と杜確「岑嘉州集序」

この節は、盛唐期において李白とおなじような主張をなし(55頁1行)、また、復古の理論が單に文學上の嗜好の問題ではなくそれを標榜するひとたちの出身階層や立身の問題と絡んで主張されているという豫想を裏付けるものの例を擧げるために置かれている(55頁15行〜56頁2行)。その例とは殷璠の「河嶽英靈集序」と杜確の「岑嘉州集序」である。

「四 まとめと課題」

この節では、この章全體の總括と今後に残された課題が示されている。結論については既に觸れているので、示された課題を要約すれば次の三點である。(1) 新興の勢力がこの主張に關與してるとおおまかには言えたとしても、彼らの出身階層についてのより精密な考察は残されている(57頁12〜14行)。(2) はじまりにおいて「詩」がややさきんずることとなった復古の主張は、同時代の盛唐古文先驅者による「文」の改革とどのように關係しているのだろうか(58頁1行〜2行)。(3) 復古主義思潮の當時の文壇に占める位置がどれほどのものであったか(58頁13〜14行)。

以上が乾氏によって示された今後の課題である。

三

この章をひとつの論文としてみた場合と、『中國の文學史觀』全體におけるひとつの章として見た場合という、ふたつの場合に分けて批評したい。

1

この章をひとつの論文としてみた場合、その論證や結論には説得力がある。これから初盛唐期の文學的な思潮を考へる際には、ここで示された結論との關係を考へないわけにはいかないと思われる。

この論文をさっと一讀しただけでは、次のような批判的な意見がだされるかもしれない。それは、乾氏は初盛唐に復古文學史觀を唱えた人々の例として、主に陳子昂と盧藏用・李白と李陽冰を擧げる。しかし、これでは傑出した個人と

いう點を線で結ぶだけの文學史のとらえ方になってしまふのではないだろうか、というものである。

しかし評者はそうは思わない。それは次の理由からである。それは乾氏が、復古文學史觀の論理が、何を述べているかということよりも、どのような場でどのような言説と関係しつつ、どのような論述を構成しているかという觀點から考察しているからである。また、それがどのような立場から發言されたのか、どのような發言を承けているのか、どのような形でまとめられているのかということを読み解いているからである。そのために、乾氏の論には説得力がある。この章における乾氏の姿勢は、傑出した個性を持つ作者を點としてそれを線で結ぶだけの見方ではない。われわれがつい抱いてしまいがちな、復古文學主義が盛唐期の一世を風靡していたかのような文學史觀とは違う側面を見出そうとしているのである。

乾氏の結論に説得力があるのは、それが表層をなぞるだけの文學史研究ではなく、その背後にある狀況についての配慮があるからだと思われる。

士大夫における文學とは常に思想や政治と渾然一體であったのであり、文學における主張とはそういったものと切り離れたところで存在しているものではなかった。このことを現代に生きる我々はややもすると見落としてしまふ。單純に文學は文學であり、政治や思想とは少し離れた場所にあるかのようについ錯覺してしまふのである。

しかし實際は、ここで乾氏が示したとおり、士大夫にとっての文學は、常に自分自身の立場と密接に關係している。その發言には單なる好みの問題ではないものが背景にあるのである。この背景についての配慮をしない文學史研究とは、やはり表層を見るだけの底の浅いものとなってしまうと評者には思われる。

ただし、ここで注意しなければならないのは、それを次のような研究態度と混同してしまふことである、と評者は考へる。それは、安易に個別の文學作品からその作者の生涯を組み立て、またその逆に安易に作者の生涯から作品を解釋

するといった研究態度である。

以上が、この章をひとつの論文として見た場合の評者の見方である。しかし、『中國の文學史觀』全體におけるひとつの章として見た場合には、また違った面が見えてくる。

2

この章を『中國の文學史觀』全體におけるひとつの章として見た場合、次のような點に氣がつく。それは、この第二章が、川合氏が第一章で示した新たな文學史の試みの、具體的な作業の例示となるべきであるにもかかわらず、そのように機能していないのではないか、というものである。

川合氏の第一章における問題意識は、第一章の書評に詳しく述べられるが、ここで問題になる點に關することを評者なりにかいつまんで示せば次のようになる。

川合氏は第一章で、次のようにその問題意識を述べる。それは、現在の「文學史觀」は「西洋近代」の思考をもとにしたものである、しかし、文化全體が大きく變容しつつある今日では、それがそのまま通用すると思われぬ、というものである（25頁1〜3行）。そして、そのような「近代への懷疑」をもとにした、新たな文學史觀を創ることを試みるべきだと述べている。

この第二章はその具體的な作業の例示であろう。第一章では、「『文學史』と稱する書物によって秩序づけられたかたち」（23頁11〜12行）では提示されていない文學史的な記述をいくつか例示している（23頁14行〜24頁11行）。この章はそのひとつとして、「正史の文苑傳、ないしそれに類する傳」（23頁18行）をもとにして、そこに表れた文學史的記述を整理しているのである。

その結果この第二章で浮かび上がってきたのは、西洋近代的な「上昇史觀」とは異質な「復古文學史觀」であり、そ

ここには乾氏によれば「中國の言説に特有の政治性」(60頁4行)があらわれている。確かに一見すると、西洋近代的な文學史觀とは違うものを提示しているかのように見える。

しかし、中國には復古文學史觀というものがある、ということを示すことは、あくまで西洋近代の歴史觀と同じ土俵のうえで違う型の例を出しただけになるのではないだろうか。近代的なとらえ方を、あくまで近代的なとらえ方の枠のなかで修正しているだけではないのか。そこには川合氏が第一章で提示した西洋近代的思考への「懷疑」というものが、どこにも見あたらないのではないか。

乾氏の言説のなかには、すでに「西洋の近代」が含まれている。確かに、川合氏が指摘するように、現代に生きるわれわれが、そこから抜け出すことは難しい。しかし、それを前提として、それに批判的に言説を組み立てるならば、そこにはおのずと言葉(の定義、概念)に對する反省が生まれてくるのではないか。だが、乾氏の言説のなかには、「近代」の思考の産物である言葉(例えば「階層」など)が無批判に、ほとんど無造作に使用されているように見える。

これでは、この章が川合氏が第一章で示した新たな文學史の試みを目指す、具体的な作業の例示となるべきであるにもかかわらず、そのように機能していないことになるのではないだろうか。

その原因は、この『中國の文學史觀』全體を通して、「文學史」という言葉の定義がきちんと示されていないことだと評者には考えられる。「西洋近代」を批判するためには、第一章においてその批判の對象となる「西洋近代」とは何か、「文學史」とは何を指しているのか、ということをより具体的に示す必要があったのではないか。

第二章が、全體の中でのひとつとして機能していないように見えるもうひとつの原因は、「新たな文學史觀」を構築するということに對しての乾氏自身の態度が曖昧なためであると、評者には考えられる。

本書全體(特に前半)を通してのコンセプトは、まだ「西洋近代」の思考に觸れる前の中國人の思考に即して、當時

の中國の「文學史觀」を見ることにより、「西洋近代」的な文學史を見直す、ということであろう。そのための作業のひとつとして、この第二章は機能すべきであろう。中國人の思考に即して考えてみれば、西洋との違いがあぶり出せるのではないか、そう考えること自體には無理がない。

しかし評者には、乾氏がどれだけそのコンセプトに即してこの第二章を執筆しているのか、乾氏の論述態度からははつきりとうかがうことができない。乾氏がどのように自分を位置づけているのか、その態度が曖昧なのである。これが、第二章が本書全體の中のひとつとして機能していないように見える、もうひとつの原因ではないだろうか。

3

評者の見た、乾氏がこの第二章で示した問題意識は次のようなものである。それは、宋代に著された『新唐書』で、復古文學主義が盛唐期の一世を風靡したかのように書かれてから、現在に至るまでその影響のなかにあり、その文學史觀から抜け出すことが難しくなってしまうている、というものである。そこで乾氏は、初盛唐期の言説を直接あつかうことにより、復古文學史觀というものが、實はそれを唱える者の出身階層の問題と關係のあるものであったことを明らかにした。

今後、初盛唐期の文學的な思潮を考える際には、乾氏によって示されたこのような論證や結論との關係を考えないわけにはいかない。重要な意義のある論文であると思われる。

しかし『中國の文學史觀』の中のひとつの章として、川合氏の提起した問題意識の前にこの第二章が置かれたときに、果たしてそれに應えるものとなっているだろうか。評者が問題點として指摘したいのは、この點にある。

これは第二章だけの問題ではなく、『中國の文學史觀』全體に通底する問題でもあるだろう。ここにはまだ、西洋の近代的思考をもとにした文學史ではない、新たな文學史觀は示されていないのである。

第三章 淺見洋二著「文學の歴史學

——宋代における編年詩文集・詩人年譜そして「詩史」説について——

秋谷幸治評

—

淺見氏によると文學史とは、西洋の歴史學の視點から「文學の歴史」を捉えることだという。つまり「文學史」とは西洋の知によって生み出されたものだけということである。

しかし、西洋の歴史學が入ってくる近代以前にも、中國には独自の文學の歴史學があったと氏は指摘する。氏はその例として、宋代になって出現した編年詩文集・詩人年譜・「詩史」説をあげている。この章は中國独自の文學の歴史學を採求するという目的のもと、この編年詩文集・詩人年譜・「詩史」説をとりあげ、氏はそれぞれに検討を加えている。氏は結論として、編年詩文集・詩人年譜・「詩史」説が宋代に成立したその背後には、「出處」や「時事」と關係づけて作品を讀もうとする姿勢があったこと、そして詩文集を詩人「一代の史」と捉える考え方があったことを明らかにしている。

まず第一節「詩史」説では、「詩史」説が、詩の中に「時事」の記述、すなわち詩人の生きた時代の歴史的記述を認める考え方であることを明らかにしている。つまり「詩史」説とは、「詩」||「史」とみなす考え方ということである。

しかし氏は、第四節「詩人年譜・編年詩文集と「詩史」説」で、第一節のこの説明に加えて次のことを強調している。「『詩史』が單なる歴史記述ではなく、詩による歴史記述である以上、そこでは當然、詩人自身の存在が重要な位置を占めているはずである」(84頁2行)つまりただ單に詩の中に「時事」の記述がなされていけば、それが「詩史」になるかというところではない。その「時事」の描寫の中に「詩人の存在のせりだし」すなわち詩人の悲しみ・怒りといったものがあらわれていないと「詩史」とはいえないと氏は指摘するのである。

氏は「詩史」説をこのように捉える根據として、魏泰の『臨漢隱居詩話』の中に見られる次のような記述をあげている。魏泰は、杜甫の詩は、「時事」が描寫されると同時に、それを超えたところに、詩人の切實な心情が吐露されているものであると説明している。そしてこういう詩こそ「詩史」と呼ぶにふさわしい詩であると主張している。これを根據に氏は、「詩史」とは、詩の中に「時事」すなわち歴史的記述がなされているだけではなく、「時事」の中で生きた詩人の切實な感情も詠われている詩と捉えるのである。

第二節「詩人年譜と編年詩文集」と第三節「詩人年譜と編年詩文集にあらわれた文學觀」では、編年詩文集・詩人年譜があらわれた経緯と、その背後にあった文學觀を明らかにしている。氏は、この二つの節で、編年詩文集・詩人年譜とは、第一に作品を詩人の「出處」、すなわち人生にからめて讀むために編まれたものであること。しかし、これらもまた、ただ單に詩人の「出處」を明らかにするのみではないことを指摘している。つまり編年詩文集・詩人年譜は、詩人の「出處」だけではなく、詩人の生きた「時事」と、その中で生起する詩人の感情をも讀みとることを目的としているということである。

氏はこのように指摘する根據として、施宿の作った蘇東坡の年譜をあげている。施宿の作った年譜は、蘇東坡の「出處」とともに、蘇東坡の生きた當時の「時事」が分かるようになっていいる。そしてそこには當時の「時事」との關わり

から生まれた「無一念不倦倦國家」「寡怨而篤於君臣之大義」という蘇東坡の精神世界をも明らかにしようとした、施宿の考え方がうかがえる、と氏は指摘する。

以上のことから、第四節「詩人年譜・編年詩文集と「詩史」説」で、氏は詩人年譜・編年詩文集と「詩史」説について次のように結論づけている。つまり「出處」と「時事」とを念頭に置いて作品を読むという点において、編年詩文集・詩人年譜「詩史」説とは、同じ意識のもとにあるものだということである。そしてこのような考え方は、詩や書を読むには、それらが書かれた時代背景を知らなくてはいけないという、中國の傳統的な「知人論世」の考え方にもとづいたものであると氏は指摘している。

最後に氏は「おわりに」で、「出處」や「時事」と関係づけて作品を読むという、宋代の詩人年譜・編年詩文集に見られた考え方は、現在の私たちにも脈々と受け継がれていることを指摘している。それは歴史的背景と結びつける形で作者の意圖を探るという現在でも私たちが普通に行っている文學研究である。私たちのこのような研究方法は、宋代にまでさかのぼることができる」と氏は述べる。

二

淺見氏は、いままで主に作品が書かれた時代を確定する資料として活用されてきた詩人年譜、編年詩文集について、それらがともに宋代になって成立したことに着目し、その背後にある文學史的思考を浮き彫りにしている。そして氏は、詩人の「出處」と「時事」から作品を読む点において、宋代の人と現代の私たちとは、共通する点があると結論づけている。詩集の出版形態から、その当時の文學觀を明らかにしていくという氏の論は、従來の研究に對して、

斬新な切り口だと言えるだろう。

ここではまずどのような所に氏の論の斬新さがあるのかを確認しておきたい。それは「文學作品」は、作家の手によってのみ生み出されるものではなく、編纂者、出版者、そして読者といった文學と深い関わりをもつ人たちの總體として生み出されているものだ、と指摘している点であろう。私たちは一般的に、「文學作品」というものは、作家の手によって作り出されるものだと考えている。つまり、杜甫の文學作品は、杜甫という「創造者」によって、蘇東坡の文學作品は、蘇東坡という「創造者」によって創造されていると考えているということである。しかし、淺見氏の論に基づくと、「文學作品」の成立は、それほどに單純ではないことに気づかされる。

淺見氏は論の中で、杜甫や蘇東坡などの年譜、編年詩文集は、詩人の「出處」や「時事」とからめて作品を讀もうとする意圖のもと、宋代になってはじめて作り出されたものであることを明らかにした。以上のことは、次のように考えることができる。それは、いままで存在していた杜甫や蘇東坡の作品を、編纂者や讀者自身の文學觀に基づいて、新たな「文學作品」にしたてあげたということである。つまり「文學作品」というものは、作家によってのみ生み出されるものではなく、編纂者、出版者、そして讀者といったそれを取りまく人びとの總體として生み出されているということである。このような氏の指摘は、従來の中國文學研究に新たな境地を開いたものだと判断されるのである。

次に、『中國の文學史觀』全體のコンセプトを再確認し、その中において、この論考がどのような意味を持つのか、評者の考えを述べたいと思う。

まずはじめに『中國の文學史觀』全體のコンセプトについて確認しておきたい。川合氏は、『中國の文學史觀』の序に當たる、第一節の「今、なぜ文學史か」の中で、次のように述べている。「二十一世紀に入った現在、西歐近代の作り出した概念はあちこちで揺らぎだしている。文學史觀も近代の文化全體の動きと連動して生まれたものであるならば、

文化全體が大きく變容しつつある今日では、そのまま通用するとは思われない」(25頁1行)つまり川合氏は、西歐近代が生み出した文學史という考え方そのものに對して、その枠組みの變容を迫っているのである。西歐近代が生み出した文學史への懷疑、それがこの『中國の文學史觀』で一貫されているものだと言えるだろう。

では西歐近代の文學史觀から脱却するにはどうすればよいのか。そこで川合氏が注目するのが、近代の中國文學史成立以前の、中國独自の文學史的思考というものである。氏によると中國独自の文學史觀は、西歐近代の文學史觀とは本質的に異なるものである。それをてがかりに川合氏は西歐近代の文學史觀から脱却した「新たな文學史」を考えているようである。ここでは、その詳しい記述は控えるが、川合氏は兩者の違いとして「發展・進歩」という視點に立つ西歐近代の文學史觀に對して、中國独自の文學史的思考はおおむね「下降史觀」が貫かれていたこと、「個性」を重んじる西歐近代の文學史觀に對して、中國独自の文學史的思考は「様式」を重んじたことなどをあげている。『中國の文學史觀』の第二節に當たる「初盛唐期における復古文學史觀の形成過程」と、第三節に當たる「文學の歴史學」は、西歐近代が生んだ文學史觀とは本質的に異なる、中國独自の文學史的思考を探索するという目的のもとに書かれているものと考えられよう。

では、このような『中國の文學史觀』全體のコンセプトから、再度淺見氏の論考の持つ意味を再度考えてみたい。先に確認したように、淺見氏の論考は、詩人の「出處」や「時事」に關係づけて作品を讀もうとする點において宋代の人と、現代の私たちとは、共通した文學史的思考を有していることを明らかにするものであった。

この結論は、西歐近代の文學史觀とは本質的に異なる、中國独自の文學史的思考を探索するという、先ほど確認した『中國の文學史觀』のコンセプトとは、むしろ乖離しているものになっていることに氣づかされる。なぜなら何度も言うように氏の結論は、宋代の人、すなわち古代の中國人の文學史的思考と、西歐近代にどっぷりつかっている私たちの

文學史觀とは、本質的なところで変わらないことを證明してしまっているからである。氏の結論から、再度『中國の文學史觀』の第一節で述べられていたコンセプトを検討してみると、次のような素朴な疑問がうかんでくる。「現在の私たちの文學史、もしくは文學史觀は本當に西歐近代によって生み出されたものなのだろうか」という疑問である。

氏がどこまでこの問題を意識しているかは分からない。しかし西歐近代の文學史觀からの脱却、そして中國独自の文學的思考の再評價という、『中國の文學史觀』全體のコンセプトそのものに對して、少なからぬ疑問を呈する形になっているのは確かである。このような問題を解消するためにも、何が「西歐近代の文學史觀」なのか、それに對して何が「中國独自の文學史的思考」なのか、さらにははっきり定義する必要があると思われる。

第四章 蔣寅著「葉燮の文學史觀」

鈴木康夫評

一

第四章、蔣寅氏「葉燮の文學史觀」は、清・葉燮『原詩』が、「詩句の個別的批評に偏りがちな詩話とは異なり、近代以前の文學史的思考を集中的に體現しているものとして、その詩觀に新たな分析を加える」(326頁13行)ことを目的としている。

それでは以下、要約を行ない、疑問点を提示してみたい。

二

蔣寅氏は、近代的「文學」の概念がまだ形成されていなかった十九世紀中葉以前、當然「文學史觀」というものは存在しなかったが、ジャンル別の史觀(例えば詩歌史觀・小説史觀等)は存在した(101頁2行)という。そして氏は、詩歌は普遍的に最もよく文學の本質的特徴を代表するジャンルであり、「詩趣」「詩的」は「文學的」の同義語である、というイーグルトンの指摘に基づき、詩歌の歴史的發展は文學史の原理を考える上で参考すべき重要な資料となる(101頁6行)、と述べている。以上を踏まえると、清・葉燮『原詩』こそが、詩歌の歴史的發展について深みのある思考

と卓越した展開を示しており、他の詩論に比べて、より文學史の一般的原理に近づいている（101頁11行）という。

第一節「作論の體——『原詩』の理論水準」では、葉燮が「理學の觀念を受容し、萬事萬物がある一定の理に従っている」（106頁6行）という前提のもと、彼が最も強く關心を引かれているのは「理」であると述べる（106頁1行）。よって詩歌史も「理」に従って變遷進化してきたのであるが、葉燮はそれを「繼承」と「交替」という二つの趨勢に分け、具體的には時代の風潮や氣風の「正變」として表現した（107頁1行）。葉燮はその中でも詩史變遷に關心を置き、『變』の中にある『理』を求め、それによって『變』がどのようにして爲されるのかを究明（108頁10行）している。

第二節「文學史の發展觀——周期論と段階論」では、まず葉燮の詩史認識について論が展開される。清の評論家たちは「偽の盛唐」を嫌い、明詩の詩史的價值を否定して「詩統」（明が盛唐を直接繼承したとして作りあげられた詩の繼承關係 110頁17行）を驅逐し、獨創性を重んじて強く「眞詩」を提唱した（111頁1行）。葉燮も同様であったが、「古いものは榮えていて、新しいものは衰えているという論にこだわる必要はない（111頁6行）」と宣言し、詩史に對する價值觀の中で時間と經典が有していた絶對性を打ち碎いた（111頁5行）。つまり、進（退）化論の觀念を超越し、詩史の實際の過程へと深く切り込んでいく（111頁7行）のである。文學創作の歴史とは、表現手法や技巧が發展し進歩していく過程（114頁7行）であり、換言すれば、詩史の發展を押し進める主な動力は變（117頁18行）である。變は正の衰えを阻止するために現れるのであり、變は目新しさと創造をもたらす（118頁1行）。また、古典文學全體の發展という觀點から、中唐文學を「古今百代の「中」（118頁7行）」とし、中唐こそが唐詩に新時代を開いた轉換點であり、體裁でも風格の上でも大きな變化をもたらした（119頁2行）とする。また葉燮は、宋詩を詩歌藝術の發展を論じる際の終點（完成品）と見なしている（120頁4行）。これは、葉燮の進化論的詩史觀の具體的な表れであるという。（120頁7行）

第三節「文學史の原動力論——自律と變」では、『原詩』は詩史が發展していく上での原動力という問題に相當の關

心を注いでいる(121頁17行)と述べられる。大多數の批評家は文學史の變遷を考察する際に、政治や風俗、君主の好みなど外部的要素にしか考えが及ばなかった(122頁3行)が、葉燮の見解は完全に異なる。古今の詩風の差異について、最終的結論としては「運勢や世の變遷がそうさせたのであって、人間の力によるものではない、天の力によるものなのだ(122頁4行)」とし、さらに「文の運は、世の運と軌跡を異にし、獨自の道を爲している(122頁11行)」とも述べ、文章の盛衰は決して世の運に隨うのではないとする。彼は、文學には自律的な發展の趨勢があること、自律性は文學史全體の動きにおいてのみ働くのではなく、詩と文という二つの大きな文學ジャンルが個別につくる局部的な動きにも貫かれていたということに気づいていた(122頁15行)。葉燮は、詩歌發展について、①踏襲と創造——詩人の持つ作用に關する概念、②小變と大變——その作用の結果、③自ら一家を爲す者と本色——詩史における詩人の地位に關係する、について詳述する(124頁4行)。「變」は創造によって發動するもの(124頁8行)であり、文學史の變遷の根本的な原動力の源は創造にある(124頁9行)。逆に踏襲はおのずと不變を生み、詩史のうちで最も平坦で緩やかな過程をつくる(124頁11行)。則ちその時代の氣風を作り上げる(124頁13行)のである。葉燮の歴代詩人に對する評價は、詩史上に於ける新しい創造の程度、つまり變を起こした功績を基準にし(125頁4行)、その最大級は杜甫・韓愈・蘇軾(125頁6行)である。杜甫への評價は、前代を繼承し、後代を啓發(125頁12行)(正と變)、韓愈への評價は、唐に於いて大變を爲したとし(126頁6行)、宋代の詩人である蘇舜欽・梅堯臣・蘇軾・王安石・黃庭堅らは、皆韓愈が影響を與え發端を開いたのだという(126頁7行)。蘇軾への評價は、韓愈以後における大變であり、盛の極み(126頁17行)、また、「風」「雅」の變を極めている(127頁1行)とする。また、葉燮の言う品量(味わい)とは風格・度量であり、すなわち才能・度胸・見識・力量の總合力でもある(127頁15行)。葉燮の詩歌史論が實際に實現しなかったのは、一種の英雄史觀であり、この英雄史觀が下地となり裏付けとなって、彼の詩人主體論の四つの要素を作り上げた(128頁8行)。偉大な詩人の偉大

さとはどこにあるのか。どうすれば偉大な詩人になれるのか（128頁12行）。葉燮の詩史観は、人々に正しい認識の方式を示し、またこれによって文學の傳統に向かい合う自らの態度を定めようとしたのである（128頁17行）。

三

本書の編者である川合康三氏が第一章で「文體は何であれ、過去の文學論のなかには、しばしば文學史的思考が含まれていることがある」（23頁15行）と述べるが、本章で扱われている葉燮『原詩』は、まさにこの指摘に相當する著である。

蔣寅氏は、この論考を記述する前提として、イーグルトンの指摘「文學理論の多くは、無意識のうちにあるジャンルを『突出した地位』に置き、そこを出發點として普遍的な結論を導き出しているのである」（101頁11行）を示す。それに基づき氏は「突出した地位」に詩歌を置き、詩史観を探ることが文學史の原理を考える上で重要だとも述べる。

さて、ここで評者は少々違和感を抱かざるを得ない。蔣寅氏の論考のように、確かに「詩」というジャンルは中國文學の中で重要な地位を占めてきた。それは今更確認するまでもない。しかし、トータルでの「文學史観」が存在しなかったのに、特定のジャンルの歴史的考察（この場合詩であるが）のみにより、果たして中國の文學史観を覆えるのである。近代以前では、「文學」という語は經・史・子・集全てを包括したものであった。それは、川合氏が第一章で末松謙澄『支那古文學略史』について「中國本來の意味での『文學』の歴史、つまり學術史ともいべきもの」（3頁15行）と説明していることから窺える。しかし今日の一般的な文學の概念からすれば、經・史・子は當然入らず、本書全體でも一貫しているように思われる。蔣氏は詩を中心に論を展開しているのであるが、全てのジャンルを見なければ

ば、文學の歴史的考察にはならないであろう。たとえ文學が集部に限定されたとしても。實際に蔣氏はこの論考の末尾で「彼ら（評者注：傳統的な中國の批評家達）の著作に、嚴密な意味での文學史の知識と理論を求めるとは酷である」（129頁15行）と述べ、近代以前において文學史觀が成立し難いことを示唆している。それは、中國の批評家達が文學史そのものを研究しようという純粹な意識で書を著していないため當然である。

ところで、「嚴密な意味での文學史の知識と理論」とあるが、それは序論でも述べられている「『原詩』が示した詩史觀は、他の詩論に比べて、より文學史の一般的原理に近づいている」（102頁3行）の「文學史の一般的原理」にも關連することと思う。

四

葉燮の論は、全體的に「變」に重きを置く。言うなれば「創造」であり、「詩史の發展を推し進める主な動力」（117頁18行）である。彼の論は「單純で獨斷的な進化論或いは退化論の觀念を超越し」（111頁7行）ているとはいっても、蔣氏は葉燮の言う「變」を多く「發展」という語に結びつける。

ここで振り返って考えたいのは、「發展」という語が、「近代を頂點とする價值觀」（10頁4行）、所謂近代の歴史觀に大きく關係する點であった。また、ウェレックの「本當の意味での文學史は個性と發展という二つの中心概念がまとめられて、初めて可能になった」（10頁2行）という言葉と、蔣氏の「葉燮の詩歌史論が實際に表現したかったのは、一種の英雄史觀」（128頁8行）であるという言が強く結びつくように思える。「英雄史觀」とは、恐らく「個々の文學者における個性」（19頁9行）を指すと思われるが、そうなると蔣氏の言う「文學史の一般的原理」は、西洋で生み出され

た文學史に近似していると言えよう。

では最後に、以上のまとめとして、本章が『中國の文學史觀』中どのような役割を擔っているのか考えてみたい。

本書のコンセプトは「近代への懷疑」(325頁15行)である。しかし蔣氏の論は「近代への懷疑」はおろか、近代の目を以て近代以前の詩論を分析していると言わざるを得ない。すなわち、中國では近代的思考が「二十世紀の總括として肯定的に捉えられている」(325頁15行)という現状を露呈しているのである。

「詩史」を考える上では非常に興味深い論であると言えるが、「文學史」という枠で見た場合は少々物足りなさを感じてしまう。

第五章 川合康三著「母胎文學」の構想——中國の戀愛文學を手がかりに——」

荻野友範評

—

ここでは、川合康三氏による、第五章「母胎文學」の構想——中國の戀愛文學を手がかりに——」（133～155頁）の要約および書評を行う。

まずはじめに、表題にある「母胎文學」と「戀愛文學」とについて正確に把握しておく必要がある。川合氏の造語である「母胎文學」とは、儒家の理念に合致するとみなされて今日まで残されてきた作品の背後に控えるであろうと推測される膨大な作品群のことであり（142頁2行～3行）、「戀愛文學」とは、「決して個々の人の戀愛體驗に基づき、實際の戀愛感情が表出されたものではない」（135頁16行～17行）く、「そうした個人的な、實際の體驗や感情が皆無とはいえないにしても、一般には戀というものの心のかたちを文藝という器のなかで表したもの」（同頁17行～18行）のことであるとしている。

本論は、このような「戀愛文學」を手がかりに「母胎文學」と名附けた文藝の總體を探っていくこうとするものである。

本論考の構成は、次の通りである。「はじめに」、「一 戀愛文學の貧困」、「二 寄託」という表現手法、「三 友情のかたち」、「四 母胎文學」の構想、「五 母胎文學」と文學史」という六つの節からなる。以下に、各節の内容を見ていく。

「はじめに」では、川合氏の文學史に對する考え方が明確に示される。この百年に「文學史」という觀念が定着すると、これまで蓄積されてきた文學に對する明確な秩序付けが行われたが、そうした秩序付けがなされた文學にはすでにつまり「文學史」という觀念が定着する以前に、過去の人々によって文學に對する無言の選別がなされていたというのである（133頁7行～8行・同頁13行）。従って、私たちが現在目にしうる「文學史」とは、そのした無言の選別という幾層ものフィルターをかいくぐって、今日まで生き残ってきた文學全體の見取り圖である、というのが川合氏の文學史に對する考え方である。そこで、川合氏はそのようなフィルターを取り除き、過去のある時點における「文學」の様相をうかがい知ろうとするのである。

「一 戀愛文學の貧困」は、問題の提起とその檢證、およびその原因を提示している。日本・西洋からの批判（134頁3行～136頁7行）を受け、なぜ中國には戀愛文學が貧困であるとされるのかを自覺的に問題提起し、その原因を「文學における道德性と政治性の優越」（136頁10行～11行）に求める。これは、儒家思想を根幹とする士大夫が文化・社會全體を支配することによって、士大夫の文學（正統的文學）もその支配を受けていたことを意味するという（同頁10行～13行）。このことは、さらに文學を成り立たせている原理と社會を成り立たせている原理とが一致することにつながる

とする（137頁11行～12行）。そのため、倫理的・社会的であるべき古典文學には、極めて私的な、非倫理的ないし反倫理的な戀愛という要素が入り込む餘地はなかったのである（136頁17行～137頁4行）、と中國に戀愛文學が貧困とされる原因を結論づけている。しかしながら、そうした儒家思想に基づく文學に戀愛文學が貧困であるという圖式は、士大夫の文學に限って適應されるものであって、戯曲・白話小説・民間歌謠などを含む文藝全體の中には豊穰な戀愛的要素が存在している（137頁17行～138頁5行）、と川合氏はいう。

上述の川合氏の主張を論證するのが、次節からの「二」「寄託」という表現方法」と「三 友情のかたち」、「四」「母胎文學」の構想」である。

「二」「寄託」という表現方法」では、君臣の関係を男女の關係に「寄託」する場合、なぜ男女の關係に「寄託」するかという問題は、文藝という本質的な要求によって生じるものと考え（141頁10行）。傳達すべき内容が言葉の裏側の意味であるにしても、作品を文學たらしめているのは、男女の戀愛關係を唱った表側の方であるとし、本來の文學の姿は、男女の戀愛關係を唱うことであろう、と（同頁15行～17行）。そして、「寄託の手法が普遍的にみられるのは、母胎文學においては戀愛が中國においても他の文化圏と同様に優勢を占めていて、それを儒家的に意義付けした作品がのこったと考えれば、君臣の關係を男女の關係になぞらえる寄託の表現手法が支配することも納得できよう」（142頁4行～7行）と述べる。

「三 友情のかたち」では、戀愛と友情を別のものと考えずに、戀愛感情をもとにししながら、そこに流れる情感を同性間の愛情に組み替えたもの、それが友情の詩と考えたいという（142頁9行～16行）。

「四」「母胎文學」の構想」は、世界中の戀愛文學に遍在する、戀人たちが楽しむ夜の戀の陶醉が夜明けによって中斷されるといふ alba（日本でいう「きぬぎぬ」）のモチーフを「母胎文學」の中に探り、戀愛文學を拾い上げようとする

試みである。具體的に alba とは、「戀人たちに朝の到來を告げるもの、つまりは別れの時が迫っていることを伝えるもの」(146頁4行)であり、その役割を擔うのには小鳥と見張り人がよく登場するという。この節は、「1 中國の alba」と「2 變形した alba」の二つに分かれる。前者では、南朝の樂府や吳歌、西曲、そして中國では早くに滅んだ唐初の『遊仙窟』という士大夫の正統的な文學とは異質な文學の中に alba が根付いていたことを確認する(149頁7行〜14行)。後者では、士大夫の文學の中においても閨怨詩のような、儒家的な社會の中でその異質性ゆえに容認されてきた戀愛詩の中で alba がかたちを変えながら残っていることを檢證する(150頁14行〜15行・154頁1行〜3行)。

「五 「母胎文學」と文學史」では、儒家の規範にかなう文學によって、儒家の規範にかなう文學觀を通じて形成された文學史に對して、第二節から第四節までで抽出した「母胎文學」の意義を提示する。士大夫が享受した文學は、必ずしも儒家的規範に合致した文學のみではなく、その背後に存在した文藝の總體としての「母胎文學」を含んだものだったということである(154頁6行〜11行)。従って、士大夫自身の中にも重層的に多様な文藝が混在していたであろうことが導き出される(154頁10行〜11行)。しかし、「造り上げられた」文學史をうち破って、本來あったであろう「文學」に到達することは、まことに容易ではない(154頁14行〜15行)、と結ぶ。

三

評者は、中國古典詩歌に關しては、全くの門外漢といってよく、この領域の第一線で活躍する川合氏の論考を中國古典詩歌研究の立場から、個別の詩の解釋を含めて論評することなどとうていできない。そこで、ここでは中國文學史という枠組みを再構築するために、川合氏がいかなる構想で臨み、それを實踐しているかという視點から本論考を考えて

みたい。川合氏が編者を兼ねる『中國の文學史觀』という書名を考慮すれば、あるいはそうした視点からの讀書が適切なのかもしれない。

本論の主旨は、中國の過去の文學に覆い被さるようにして、幾層にも張りめぐらされたフィルターを一枚一枚丹念に取り除き、あるいはその隙間に見え隠れする手がかりを通して、文學本來の姿を捉え直そうとするものである。

その作業は、主に第二・三・四節で行われている。讀者としてみれば、いずれもうなずかざるを得ないと思われる作業とそれから歸納された結論である。

第四節は注(5)にも挙げられている通り、川合康三「中國のアルバ——あるいは樂府「烏夜啼」について——」(『東北大學文學部研究年報』三五、一九八六年)を再考して、抄録したものであるから、戀愛文學であることを象徴する alba という現象が、中國文學の中にも間違いない存在するということに關しては、川合氏も十分な確信を持って主張できたことは推察にかたくない。中國の alba について、さらに理解を深めようとするならば、この論考は必讀であろう。また、川合氏の『中國のアルバ——系譜の詩學』(汲古書院、二〇〇三年)にも「中國のアルバ——あるいは樂府「烏夜啼」について——」が再録されており、川合氏のこの論考に對する強い思い入れが感じられる。

第四節は上述のような経緯を持つ部分であるのに對して、第二・三節は、第四節をより説得力を持った主張とするための前提として、是非とも用意したかった二節であろう。すなわち、第二・三・四節で展開される議論を簡單にいつてしまふならば、すでに一定の解釋が施されている詩歌に對して、新たな視点(方法といってもいいかもしれない)を導入することによって、一種の読み替え作業を行っているのである。読み替えの結果、「戀愛文學」を浮かび上がらせるために、第二節では君臣關係と戀愛關係を、第三節では友情と戀愛を、それぞれ相互に読み替えることが可能であることを論證しているのである。

四

ひるがえって、本書における本章の位置付けおよび新たな中國文學史への構想について考えてみたい。

編者を兼ねる川合氏の本章は、川合氏が「一今、なぜ文學史か——序にかえて——」（3〜27頁）で述べた、今後に向けての新たな文學史を構築していこうとする一つの試みの章と位置付けられよう。事實、第一章「四 中國における文學史的思考」（22頁5行〜26頁1行）において、西洋近代思想による中國文學が形成される以前の、中國固有の傳統的な文學史的思考がたどれる材料の一つに「無言の文學史」・「無形の文學史」（24頁6行）とでも稱すべき、潜在的な文學史観があると述べている。そして、今日の我々が見る文學作品、およびある時代に生産された無数の作品が取捨選擇されるには、人々の無言の選別が働いており、その無言の選別の蓄積が「無言の文學史」「無形の文學史」であるという（24頁8行〜11行）。「無言の文學史」「無形の文學史」とは、本章の「母胎文學」という土壌の上に延々と止むことなく築かれた續けた文學史であると推察される。そこで川合氏は、本章で中國文學に缺如しているといわれる戀愛文學の痕跡をたどることによって「無言の文學史」、「無形の文學史」の基盤である「母胎文學」の一側面に迫っているのである。こうした試みが、本章において極めて興味深い論考として結實している。

しかし、ここで『中國の文學史観』と題した本書の主旨を思い返す必要がある。川合氏は第一章で、「二十世紀に入った現在、西歐近代の作り出した概念はあちこちで揺らぎだしている。文學史観も近代の文化全體の動きと連動して生まれたものであるならば、文化全體が變容しつつある今日では、そのまま通用するとは思われない。今日には今日の新たな文學史観が求められるだろう」（25頁1行〜3行）と述べている。私たちの中にある文學という概念は、西歐近

代という文化の中ではぐくまれた概念であるといえよう。そうした文學の概念のもとに整理され、構築されてきた中國文學史はいうまでもなく、西歐の文學 (Literature) の概念で整理され、構築されたものである。少なくともこの百年の中國文學史は、それまで中國の文學として認知されてきた儒家の理念に合致する文學 (士大夫の文學・正統的文學) の内外に、とりわけ外に、西歐の文學 (Literature) の概念に合致する作品を發見しようと努力し、その結果として、今現在私たちの目の前に提示されている中國文學史が存在するのである。このような文學への思考が常に對象として据えていたのは、川合氏が本章で注目すべきであるとしてあげた戯曲・白話小説・民間歌謠などのジャンルに分類される作品群ではなかっただろうか。

例えば、第八章 (225頁〜255頁) で言及される笹川種郎『支那小説戯曲小史』が評價しようとしたのは、戯曲であり、白話小説であった。これは、こうした作品群への注目が、十九世紀末の日本において、すでに見られたということ物語っている。とすれば、川合氏が注目すべきであるとした作品群は、すでに百年以上前から注目されていたともいえる。その時期がちょうど「この百年には「文學史」という觀念が定着し、過去の文學に對してより明確な秩序付けが行われてきた」(133頁7行〜8行) というのと一致することは、川合氏の「今日の新たな文學史觀」(25頁3行) という構想が、すでに百年以上前に存在していたともいえないだろうか。

ただ、ここで十分に確認しておかなければいけないのは、同じジャンルの作品群を對象としている笹川と川合氏との相違である。笹川は、ただ「人情の琴線に觸れ」(233頁1行) するという主觀的嫌いが強い視點から作品を評價しようとした。對して、川合氏は、中國文學研究にはこれまで用いられることのなかったまったく新しい「alba」という觀點を導入し、中國文學研究に新たな側面を切り拓いた。評者が言を重ねるまでもなく、本章第二・三・四節に見られる通り、その構想は極めて興味深い論考として讀者の前に提示されている。

しかし、中國文學研究に「alba」という觀點が效果的に機能していることが、そのまま「今日の新たな文學史觀」(25頁)の構築に直結するかという問題にいたっては、評者は懐疑的にならざるを得ない。川合氏は、これまで見えなかったもの(戀愛文學)を、従来の「中國文學」という枠組み(戯曲・白話小説・民間歌謠などとジャンルわけされた作品群)の中からすくい上げていく。もちろん、これはこれで十分に評價されるべきことであるが、それが新しい文學觀、ひいては新しい文學史觀の構築となりうるのかどうか。事實、川合氏自身、こうした手續を経た後に、新たな文學史觀を提示しているようにも受け取れない。評者の目には、従来の「中國文學」の對して、従来よりも斬新な方法で切り込んでいくようにしか映らないのである。

要するに、本論考は約百年前に輸入された西歐近代の思考に基づく文學(literature)の概念という呪縛からの脱却は果たしておらず、そうした思考の延長線上にあって、ただその構想をこれまでよりもさらに擴充することを企圖しているものと感じてしまう。

五

以上、川合康三氏「五 「母胎文學」の構想——中國の戀愛文學を手がかりに——」の要約の後、本書における本章の位置付け、その構想に對して批判的な検討を試みた。

本書の主旨である新たな文學史觀の確立という大問題に對して、川合氏の論考を讀む限り、明確な回答が提示されたとはいえないであろう。しかしながら、この大問題は、「文學」とは何か、という大きな問いを暗示しているようにも思える。すなわち、西歐の文學(literature)が懷疑的な概念となりつつある今日、「文學」とは何か、少なくとも何を

して「文學」とするか、という問いに答えることなしには、新たな「文學」史も、新たな「文學」史観も構築されない
ということが浮き彫りになったのではないだろうか。

この問いに答えることは、川合氏が「或いはそもそも文學史というものの自體が今日成立可能であるか否か、存在意義
があるかどうかについても、改めて考え直す必要がある」（25頁³行³4行）という問題にも、自ずと何らかの示唆
を與えてくれるようにも思われる。

第六章 和田英信著「明治期刊行の中國文學史―その背景を中心に―」

沼尻俊裕＋鈴木拓也評

一

ここでは『中國の文學史觀』の第六章にあたる和田英信氏の「明治期刊行の中國文學史―その背景を中心に―」（157頁）という論考について、要約をし、それについての批評をおこなうことにしたい。

この論考は、明治二十年代後半から三十年代にかけて「支那文學史」という著述が一齊に出現した背景には、どのような社會的要因があったのか、ということを問題提起として取り上げる。その問題に對して、當時の教育制度や授業科目などの視點から捉えたその詳細な調査の報告である。

以下、論考の順を追って、節ごとに和田氏の主張の要約をおこない、その後それについて報告者の觀點からコメントを付し、議論を展開した後、最後に全體をまとめることにする。

二

まず、この論考の構成を舉げておくと以下のようになっている。

はじめに

157～161頁

一 學制―近代的教育制度の成立

161～163頁

二 東大および付屬古典講習科―「文學史」の著者たち

163～166頁

三 「文學」關係の専門學校の成立―「文學史」の機能する場

166～178頁

「はじめに」(157～161頁)では、明治二十年代後半から三十年代にかけて數多くの「支那文學史」という著作が集中して著された現象は何を意味しているのか、という問題を提起する(159頁)。それについて川合康三氏のいう近代歴史學成立の影響や、平岡敏夫氏のいう當時の文學觀念の動搖とその定立への模索という新たな問題によって著述を促されている、とひとまず理解する(161頁)。そのうえで、明治期における中國文學史成立の意味を、授業科目・教育の場・その著作という視點に立つことで、新たな側面から捉えることが可能である、と述べている(161頁)。

「一 學制―近代的教育制度の成立」(161～163頁)では、明治に施行された「學制」という新たな教育制度によって、従來とは比較にならないほどの多數の學生・生徒が生み出されたことを、學校在籍者數の具體的な數字の變遷から確認する。その學生が同時に近代的な讀者層を形成してゆくものと考え(162頁)。この新たな讀者層が「文學史」の需要を支えたのではないか、と述べる(163頁)。

「二 東大および付屬古典講習科―「文學史」の著者たち」(163～166頁)この節では、「支那文學史」の著者たちについて述べている。その多くは、現在の東京大學の前身にあたる學校において、同時期に同一もしくは隣接する場で學んだ人々である。その影響と、また國文學や國史など隣接する諸分野との交流から「支那文學史」が作られた、ということが「支那文學史」という著作の集中と明らかに關係があるだろう、と和田氏は述べる(166頁)。そして同時に、「文學

史」の草創期においては、「史」という學術體系や敘述形式の新しさという面が、「文學」の内容を規定することよりも、相對的に學生たちに大きな影響を與えていたのではないか、としている(166頁)。

「三」「文學」關係の専門學校の成立―「文學史」の機能する場(166～178頁) この節では、「文學史」の機能する場としての學校の成立とその實態の一端を分析する。とくに論考の中心は、この節に多く枚數が割かれており、ここの論述に重點が置かれている。

まず、著述としてではなく、學科目としての「支那文學史」が早くに現れるのは在野の専門學校であったとして、早稻田大學の前身である東京専門學校と東洋大學の前身である哲學館のふたつの學校の漢學科目について検討する。

とくに哲學館については、漢學專修科の設置が漢學の傳統の維持という理念と同時に、「實際的かつ社會的な動因」がその契機となっていたと考えられる(170頁)という。「實際的かつ社會的な動因」とは、「學制」という新しい教育制度にともなう教員不足のために、教員檢定試験への對應などの面を指す(169頁)。

さらに漢學の科目と擔當教員について詳細な検討を加え、「新しい世代によってはじめてなし得る新しい科目、新しい學問との認識があった」としながら、在來の個別のテキストの講述を中心とした科目のなかにおいて「支那文學史」の位置づけは相對的には低かったとする(176頁)。しかし「支那文學史」も講義録が實際に刊行され、少なからぬ需要があった。そうした需要の背景には、一方で「好學の徒による教養主義的な志向」があり、また一方では、「實利を求めると功利的な動機によって下支えされたものであったという點」にも注視すべきである、と主張する(176頁)。

また、和田氏は、この明治期の教育の場の調査から『文學史』を含む新しい學問、新しい著述への情熱的なまでの姿勢」という印象をいだいており、講義録や雑誌という自前のメディアによる「文學史」の發表という著述のあり方については、「社會的な動因とは別の内發的な契機があり、そこに學術的な大きな意義がみとめられるであろう」とす

るが、この論考では「別に報告の機会を用意し」と述べるにとどまる（176～177頁）。

最後に、講義録や雑誌という自前のメディアによる「文學史」の發表については、この時代に急速に整備された出版機構によって、さらに大きな需要との連係がとれるようになった、と述べる。

和田氏は、その一端として博文館の明治二十五年以降刊行の『支那文學全書』と明治三十一年以降刊行の『帝國百科全書』という二つの叢書の比較を擧げる。そして、前者が「個別のテキストの講述・解釋を事とする傳統的なもの」、後者が「體系的な通史という従来とは異なるスタイル」で著述されていることから、前者と後者のあいだに「文學史」以前・以後という境界線が横たわっており、「ここにもあるいは編集者の新たな學術觀と意識的な選擇の目が反映していると言えないだろうか」と述べる。そして、文化の一分野としての「文學」、その通史としての「文學史」という著述のスタイルの誕生と成長は、出版機構の整備というような新しい社會的條件の變化とも呼應していると考えられるのではないかと述べて、本論を終わる（178頁）。

三

第六章において、もっとも評價すべき點は、日本における「中國文學史」成立の流れを丁寧な調査され、整理された點である。このことは、「中國の文學史觀」という本の、一つの章としてみたときも、また獨立した一つの論文として見たときも、揺らぐことのない評價だと思われる。

ところで、明治期の「漢學」と、現在我々が研究對象としている「中國學」のおかれている状況について比較を行ってみるとどうだろうか。やはり一番問題として考えられるのは、實學であるかそうでないかという點にあると、評者は

考える。

本章にも述べられているとおり、明治期において、「漢學」つまり「中國學」を學ぶと言うことは、新たな教育者となる上で、必要不可欠な要素のひとつであり、需要と供給の関係から言えば、壓倒的に需要が増さっていた。供給が追いつかないのであるから當然、概説書・入門書の類は必要なわけで、「中國學」内の文學という分野に關する概説書が誕生する。それだけであれば、概説書の書名は「支那文學」となるところである。ところが「史」という字がついて「支那文學史」となっている。「史」は概説書を書いたり、教授する際の方法論であるわけだ。この教授方法の變化について、本章は詳しく述べられている。

今日においてはどうか。「中國學」はもはや實學と言える状況にない。中學校や高等學校の國語における、漢文に對する重要度の割合から考えても、一目瞭然であると思う。ようは需要が極端に減少してしまったわけだ。今日のような状況において、中國文學の概説書はどのような讀者を対象に、どのような方法で著されるべきなのであるか。おそらくその方法としての最有力候補は、川合氏のいう新たな文學史觀ということになるであろう。

第一章の書評でも言われているように、本章は新たな文學史觀確立のための土臺となるべく、もうけられた章であり、西洋近代思想と、その影響下に成立した文學史觀そのものを明らかにせねばならない。果たして本章はそのような役割を十分に果たしているだろうか。確かに「中國文學史」成立の流れを整理することで、新たな文學史觀確立のための土臺は作られたようだ。しかし本章の與えられた役割の全てではない。もう一つの課題、西洋近代思想とその影響下に成立した文學史觀そのものを明らかにすることについてはどうか。今回は教育機關や出版機構などの外的要因について述べたのみで、「中國文學史」を著した研究者の内實にまでは觸れられることはなかった。まさに氏によって語られなかった部分こそが重要なのであり、述べられて初めて、第六章としての役割を過不足なく果たすことになったのではないか、

と評者は考える。この點については氏の「別に報告の機会を用意し」という言葉を信じ、第六章の書評を終えたいと思う。

第七章 竹村則行著『支那文學大綱』と田岡嶺雲

關 清孝評

一

わが國の「文學史」研究は、明治期にその氣運が高まったといつてよい。具體的な動きが、古城貞吉『支那文學史』（明治三十年）や兒島獻吉郎『支那文學史』（明治二十四年）の刊行であり、その中の一つが、田岡嶺雲らによる『支那文學大綱』（明治三十〜三十七年）である。⁽¹⁾この時期に、なぜ「文學史」研究が勃興したかについては、第一章にて、川合康三氏が「西歐の近代文化の攝取を始めた明治期の日本において、西歐から傳來した文學史という概念と日本に古くから浸透していた漢學の蓄積とが結びつき、そこに中國文學史が誕生することとなった」（6頁）と述べている。傳來した西歐思想のもと誕生した「文學史」を、田岡嶺雲らが刊行した『支那文學大綱』を一つのサンプルとして分析し、さらに、今日における學問上の問題をも明らかにしたものが本章である。

そのため、テキストの順は追わず、本章の二つの主張にそつて要約をおこない、その後で評者の觀點からコメントを付すことにする。

竹村氏はまず前提として、①歐化政策の反動として漢學復興が胎動したという時代的背景(182頁)、そして、②田岡嶺雲が夜鬼窟と稱した自らの下宿が同人たちのたまり場となっており、そこから雑誌を發行していたということ(184頁)や、田岡嶺雲の身近な所で『國文學大綱』が刊行されたこと(185頁187頁)などの個人レヴェルでの背景を述べる。そして、こうした背景の中で刊行された『支那文學大綱』については、西洋の分析手法である評傳のスタイルを用いていること、対象となる人物の評傳・略傳・交友・人物評價・作品の鑑賞という構成を取っていること、シラーやワーズワースなど西洋の詩人を引き合いに出して中國の詩人を評論することなどの『支那文學大綱』が用いた手法を指摘しつつ、各冊を執筆者別に分析する。具體的には以下の通りである。^②

大町桂月『白樂天』(189頁)

藤田劍峯「敘論」・『司馬相如』・『司馬遷』(190頁)

白河鯉洋「韓子」・『陶淵明』(193頁)

笹川臨風『湯臨川』・『元遺山』・『杜甫』・『曹子建』(196頁)

田岡嶺雲「莊子」(200頁)・『蘇東坡』(201頁)・『屈原』(205頁)・『高青邱』(205頁)・『王漁洋』(208頁)

こうして、各冊を分析した結果、最後に「六 まとめ」で『支那文學大綱』の長所と短所を述べる。まず、短所については、二つの面から述べている。内容は、各冊の研究や言及が細部にまで及んでいないことである。表面的には、原詩原文のままの多量の引用や、誤植が目立つことである。對して、長所は、明治後半に於て西歐の新しい文學批評の手

法を借りて、中國文人の評傳と評論を試みたことである。(217頁)

そして、田岡嶺雲個人に對しては、「情(情熱)」をキーワードとして、綿密で周到な調査によって、明治期における意氣軒昂たる青年文人田岡嶺雲の人間像を浮かび上がらせる。

そこから、明治期の文人が綴った文章から溢れ出る熱氣を感じ取る。そして、そのことから今日の中國學(中國文學)は、明治期に比べ學問レベルは進展し深くなってきているが、反面どんどん狭く窮屈なものになっているという警鐘を鳴らし、本章は結ばれる。

三

さて、本書に則れば、この章の目的は、明治期の「文學史觀」を明らかにすることであろう。事實、本章には『支那文學大綱』と田岡嶺雲を中心とする同人への見直しを通して、所謂新漢學派(赤門文人)の中國(支那)文學史觀について追求する(183頁)とある。しかし、本章の結論と本來の目的が乖離しているのはなぜなのか。

それは、『支那文學大綱』執筆者の文學史觀に迫るため必要な多くの疑問を保留にしているからではないだろうか。例えば、ほかの多くの「文學史」と稱する書物が、時代別に記述しているのに對し、作者個人ごとに各冊を構成していること。各冊の構成、つまり、対象人物は必ずしも時代順に配列されていないこと。そして、『支那文學史大綱』ではなく『支那文學大綱』であること、などである。

では、『支那文學大綱』發刊という營爲のみが意味を持つにすぎず、その内包として意義ある「文學史觀」を持ち得なかったのかというと、必ずしもそうではなかった、と評者は思う。そこで、以下において『支那文學大綱』や田岡嶺

雲らの手による文章などを改めて分析することによって、彼らの「文學（史）觀」を出来るだけ示したい。

『支那文學大綱』は、各巻の冒頭に「支那文學大綱に冕す」という文章が記されている。そこには、

我徒茲に支那文學大綱を著し、これらの諸大家を十六巻の中に、或は一人、或は二三人を限りて記傳し、評論し、其餘、文豪の列時せるもの、又皆之と相顧應せしめ、繋くるに其時代の文學の大概を以てし、前後相連貫して、支那文學の發達を知るに便にせしむとす。

とある。各時代の見るべき「文學者」をとりあげ、それらを繋げることで「支那文學史」を形作ろうとしていたのである。そのことは同時に、『支那文學大綱』に取り上げた人物たちを各時代を代表する「文學者」と見なしていたといえよう。このような方法が「文學史」爲りえるのかということについては、笹川臨風『支那文學史』の「例言」に、

先秦（秦朝以前）の文學を詳論するもの知友藤田劍峯氏の先秦文學あり。支那文學を史的に敘述したるもの古城貞吉氏の支那文學史あり。各朝卓出したる文士の傳記は同人等合著の支那文學大綱ありて之を詳にす。今や支那文學の研鑽漸く盛ならんとす。

とある。同人の一人である笹川は、『支那文學大綱』を藤田の『支那文學史稿 先秦文學』や古城の『支那文學史』と並ぶ、「文學史」の書物と認識しているのである。つまり、「文學者」個人の傳記を「文學史」を語る上での一つの手法として位置づけているのである。

そして、その対象となる支那文學に對しては、同じく「支那文學大綱に冕す」に、「支那文學は、幾んど二千年の昔より我が國に入りて、根底を有すること深く影響を及ぼせること大なり。支那文學を解せずんば、我文學の一半を解する能はずと云はむも不可なし」とある。また、田岡嶺雲「漢學復興」には「今にして漢學を復興せずんば、漢學それ遂に滅びん哉。漢學の滅ぶるは、吾國の思想と文學との大半を滅ぼすなり」とある。このように、田岡らは支那文學を國

文學の源流と位置付けていたようである。そのため、「漢學」が滅びれば、自國のアイデンティティーも消滅すると考えていたのであろう。つまり、「漢學」や「支那文學」を外國文學として見ていないということである。⁽⁴⁾

そのため、明治四十三年から四十五年までに都合十二冊が刊行された『和釋漢文叢書』では、田岡嶺雲自身が、

將來の漢學の研究は新たな様式を要す。破天荒なる本叢書の刊行は漢學研究に對する一大革命にして、蓋し又時代の要請也。

と記し、自ら「破天荒」と稱しているように、漢學復興のために、様々な手段を用いようとしている姿がうかがえる。實際、この『和釋漢文叢書』は、本邦初の書き下し文による書物である。西洋近代の手段を用いて「支那文學史」を敘述したことも、同様に「漢學復興」のためであるとも考えられうる。

また、「文學者」個人については、田岡嶺雲「文藝と民心」に「嗚呼文士一時と相渉らざる何ぞ憾みん、古來大才のもの多く當世に容れず。蓋し大才衆愚の眼孔に映ずる能はざればなり」とあり、大才のものが、生きた時代に受け入れられなかったことを述べている。そこには、嘆息と同時にそのことを受け入れる姿勢も読みとれる。このことは、竹村氏自身も感じていることであり、田岡が執筆した『王漁洋』に、あまり情熱が感じられないのは、「詩人の生涯において遭遇した困難や悲劇の度合いが、王漁洋の場合は前三者の詩人ほど深刻ではない」(210頁)と分析していることからうかがえる。このように、田岡嶺雲は、不遇な人生を送った人物が、「文學者」爲りえると信じていた、と考えられる。これらのことから考えられる、田岡嶺雲たちの「文學(史)觀」は次の四つである。

- ① 『支那文學大綱』に取り上げた人物を各時代を代表する「文學者」と考えていたということ。
- ② 各時代の代表的「文學者」を取り上げることで、結果として「文學史」が形作れると考えていたこと。
- ③ 「支那文學」を國文學の源流としてとらえており、外國文學としてみていなかったこと。

④ 才能を持った人物というのは、その時代に認められるものではなく、結果として不遇な生涯を送った人物が大文學者となりうると考えていたということ。

補足するならば川合氏は、文學史の持つ問題として、文學者「個人の個性」を重視するのか、それとも、同時代の文學環境における「時代の個性」のどちらを重視するのか（20頁）という問題を掲げる。この問題に對して、田岡嶺雲らは前者をとり、それを評論というスタイルによって實踐していたと見ることも出來よう。

さて、以上の四點と西洋近代思想が流入したことによって形成された「文學史觀」とを結びつけて考えるには、もう少し慎重を期す必要がある。ただ、西洋近代思想と『支那文學大綱』をめぐっては、その議論以前に一つの大きな問題が残る。

それは、『支那文學大綱』は、はたして「文學史」の書であるか否か、という問題である。各時代を代表する「文學者」を各冊で一人ないし數人取り上げ、評傳や作品を取り上げるといふスタイルの『支那文學大綱』を今日のわれわれの感覺をもって「文學史の書である」と斷言することができるであろうか。少なくとも田岡嶺雲や笹川臨風自身は、「文學史」の書と認識していたようである。そのことは、先程見たとおりである。しかし、田岡嶺雲たち編者はそうであっても、それを研究對象とする現代のわれわれは、その認識をそのまま引き繼いでよいのであろうか。この作者を單位とするスタイルについては、確かに川合氏が「自分という読み手と作品の書き手とが一對一の關係で結びつく、その緊密な個と個の紐帶によって讀む行爲が成立する―これはまさに近代以降の文學のありようといふべきでしょう」といふように、一見、近代の産物である「文學史」らしく見えるかもしれない。しかし、川合氏がいうのは、あくまで読み手としての行爲であり、「文學史」を創造するということとは單純に相容れることはできない。ここで問題にすべきは、創造されたものが「文學史」か否かということである。この問題は、いったん置いておくとしても、いづれにしる、田

岡嶺雲らは明治期に流入した西洋近代思想に立脚して『支那文學大綱』を生み出したのである。極端にいえば『支那文學大綱』は近代そのものなのである。つまり、本書が執拗にこだわった近代西洋思想がそこにある。しかし、田岡らの認識、いかえれば、近代明治の認識をそのまま引き継ぐ形で、『支那文學大綱』を「文學史」の書として取り上げ分析を始めること、そこに、最大の問題が存在するのではないのだろうか。本章がまず凝視すべき問題はそこにある。明治期に創り出された、「文學史」という共同幻想から徹頭徹尾乖離してこそ、明治期の「文學史」を研究することの意味が見えてくるのではないだろうか。今後本書刊行に携わった先生方の手によって解決されるであろう事を期待して止まない。

しかし、本章が指摘されるとおり、田岡嶺雲を初め明治の文人たちの文章に力強さや情熱がみなぎっているのは確かなことで、このことは「文學史」をめぐる問題と同様、われわれ自身が絶えず衝突し続けることになるであろう。同時にそれは、現代に生きるわれわれが中國學、はたまた中國文學を研究するという必然性を問われていることに他ならない。

- (1) 當時の具體的な背景については、本書第六章を参照。
- (2) 『支那文學大綱』の構成や目次・體裁などについては、「資料編 日本で刊行された中國文學史」の42〜45頁を参照。
- (3) 西田勝 編『田岡嶺雲全集』第1卷（一九七三年 法政大學出版局）所收。
- (4) 田岡嶺雲が述べる「漢學」や「支那文學」が、今日のわれわれが口にする「中國學」や「中國文學」と同一であるか否かという問題がある。そこで、本稿では文字を置き換えずにそのまま使用した。
- (5) 西田勝 編『田岡嶺雲全集』（前掲）所收。

(6) 川合康三『中國のアルバー系譜の詩學』「あとがき」「系譜の詩學」をめぐって―(二〇〇三年 汲古書院)

第八章 西上勝著「人情の探求と小説史の構築」

—— 笹川種郎著『支那小説戯曲小史』をめぐって——

音羽希美＋荻野友範評

一

本章では、西上勝著「人情の探求と小説史の構築」—— 笹川種郎著『支那小説戯曲小史』をめぐって——（225頁～255頁）を要約した後に、卑見を述べたいと思う。

本論考は、「はじめに」「一」「中國」小説史の構築」「二 人情の探求」「三」「國民文學」派からの批判」「『小史』以後」の五節からなる。

本論考の中では、副題としてあげられている笹川種郎著『支那小説戯曲小史』をはじめとして、いくつかの中國文學史と稱される書物や論考、文學團體などによる文學觀・文學史觀が提示される。よって、まず節立てに従って、本論考の内容を概観しながら、そこに見えるいくつかの文學觀・文學史觀を拾い上げた後に、それら相互の關係をも視野に入れ、西上氏の文學觀・文學史觀を検討する。

「はじめに」で、西上氏は本論考の目的を次のように述べている。「笹川は、……中國の小説戯曲に一體どのような文學的價値を見出そうと意圖したのであるうか。また、彼のそうした企てはいかなる反響を得、彼のその知的探求の進路はどんなふうに移り變わっていったのだろうか」(226頁2行〜4行)と。従って、要約は、この問いへの回答をすくい上げるといふ方法で進めてみたい。

笹川種郎著『支那小説戯曲小史』(以下、西上氏に従い『小史』とする)成立や刊行の経緯、その背景について見ておく必要がある。本論考は、『小史』内部の検討、外部との関わりについての考察ということを軸に論が展開されているからである。なお、本書評で論じるのは、「西上勝著「人情の探求と小説史の構築——笹川種郎著『支那小説戯曲小史』をめぐって——」であり、「笹川『小史』」ではないため、評者が読み取る「笹川『小史』」は、あくまでも西上氏の論考を通しての理解であることを付言しておく。

笹川種郎(一八七〇—一九四九)著『支那小説戯曲小史』は、明治三十年(一八九七)六月十日、東京神田の東華堂から、附録を合わせて全一九一頁、本文一五九頁という體裁で發行された(225頁5行〜6行)。この『小史』成立の経緯については、創刊後まもない本格的文學雑誌『帝國文學』に掲載された論考をもとにしてまとめ上げられ刊行されたということを知れるのみである(225頁14行〜15行)。

西上氏の調査によって、『小史』成立の経緯をより詳細に見れば、次のようである。『帝國文學』(明治二十八年一月創刊の月刊誌)は、明治二十七年の日清戦争における先勝以来日本の社會に臺頭してきた強力な國家意識を背景に、

「國民文學」の創造樹立を旗印に掲げていた。當時の帝國大學の關係者である岡田正美・高山林次郎（樗牛）・桑木嚴翼らが中心となって結成された帝國文學會が編集にあたった（226頁14頁～227頁1行）。笹川の『小史』は、そのような『帝國文學』の誌上において、明治二十九年（一八九六）刊行の第二卷に都合四度にわたって掲載された論説を中核部分に据えて書き下ろされた著作である（226頁7行～8行）。また、笹川は『小史』刊行と前後して、關連する論考をいくつか發表している。藤田劍峯らと共同編集の『支那文學大綱』卷之三の『李笠翁』・卷之五の『湯臨川』、『帝國文學』第三卷第六號「湯若士の南柯記」などがそれである（227頁3行～13行）。

「一」「中國」小説史の構築」では、前に述べた笹川『小史』成立や刊行の経緯とその背景、および笹川自身が中國の小説戲曲の變遷を説く意義とそのためのもつ枠組みとが示されている。

まず、笹川が評價しようとした対象は、中國の傳統詩文に對して戲曲小説の價值が不當に低く見られてきたことに對して異議申し立てを行つた批評家、作者である金聖歎、李漁、湯顯祖であった。西上氏はこれを、笹川「自らが日本に於けるそれまでの傳統的漢學の再檢討を行うための格好のモデルとすることができると見なされた対象であつたに違いない」（227頁15行～18行）として、笹川が戲曲小説の變遷を説く意義を見出している。

次に、笹川が金聖歎・李漁を高く評價する理由は、「實際的傾向を有する北方人種」が生み出した「實用的」文學の中に、中國の小説戲曲の價值を發見したことにあるとする（228頁15行）。ここに、西上氏は、「朴野なる自然風土に育まれた中國北方人種が生み出した文學は實際的に傾いた實用文學であつたのに對し、溫暖優美な自然風土に育まれた南方人種が生み出した文學は思想豊富な文學だつたとする風土決定論的文學史觀は、笹川の創案というよりも、東亞學院に集い雑誌『東亞説林』を刊行した人々が分かち合つていた考え方で」（229頁14行～17行）あろうとして、笹川が戲曲小説を説く枠組みを讀み取ると同時に、一つの文學史觀を抽出している。

「二人人情の探求」では、笹川が「中國の小説戯曲に何を期待したのか。中國の小説戯曲がどのような價值を持つと考え」（232頁11行）たのかへの考察である。これに對する西上氏の結論は、次の二點に集約されるであろう。

第一に、「笹川が文學に期待するのは、「人情の琴線に觸れ」ること、自然な人間感情の發露を讀みとることであつて、儒教の倫理規定を盛り込まんがための文章ではなかつた。小説戯曲こそが、この微妙な心理の表出が可能な様式ではないのかという期待が、笹川を小説戯曲史の著作へと突き動かしたのではないだろうか」（233頁1行～4行）、第二に、小説戯曲には作中人物の性格や心理の描寫が精密に表現し分けられているために、自然な人間感情の流露を發見できると（234頁6行～8行）、（237頁7行～8行）、という二點を西上氏は讀み取っている。

この二點は、『水滸傳』に對する笹川および金聖歎、曲亭馬琴の評價からうかがえるようである。第一、第二ともに、笹川はまったく金聖歎の讀みに依存しての考えである（235頁5行）。また、第二の點の裏返しとして、曲亭馬琴の『水滸傳』解釋に見えるような勸善懲惡的小説觀には、過敏な拒否反應を示し、それに對抗するのである。（237頁7行～8行・238頁15行～17行）。

このようなことから、「笹川は、……勸懲を第一義とする小説觀を嚴しく退けて、自然な人間感情の發露を見、客觀的な世態風俗の描寫に意を拂つた作品に注目し、中國の舊小説戯曲を讀もうとする自らの態度を鮮明に示そうとしたのである」（240頁1行～3行）と西上氏は笹川の立場を明らかにする。

ここまでは、笹川『小史』および關連する論考などの内部へ向けた考察といつてよいだろう。これで、「はじめに」で西上氏によって發せられた「中國の小説戯曲に一體どのような文學的價值を見出そうと意圖したのであるか」（226頁2行～3行）という問いへの回答が得られた。次節は、このような笹川の態度が外部とどのように関わっていたのかについての考察である。

「三 「國民文學」派からの批判」では、これまで見てきたような笹川の中國の小説戯曲に對する態度が、何に基づくものか、日本の同時代における文學を論じる場では、どのように位置づけられていたかを整理している。

西上氏によれば、こうした笹川の小説戯曲の作中に込められた勸懲の意を退け人情の幽微を求めようとする態度は、坪内逍遙が馬琴の勸懲主義を排し、『小説神髓』で示した「小説の主腦は人情なり世態風俗これに次ぐ」という近代的小説觀に裏付けられていたとする(240頁5行〜12行)。

その笹川の小説觀は、當時のいわゆる赤門派、すなわち機關誌『帝國文學』を發行していた帝國文學會の同人によって厳しく批判される。西上氏によれば、「世界各國にはそれぞれ特色ある國民文學が備わっている」(242頁1行〜2行)という觀點から、笹川『小史』の中國の小説戯曲の敘述には、「中國の小説戯曲が世界の文學の中で如何なる位置を占め得るものか、ことに西洋の文學に對置しうるものであるかどうかの視點が決定的に缺けている」(241頁15行〜17行)、また、「本來そうした比較研究の視點に依據して敘述を進めるべきであるにも関わらず、中國で行われた小説評點の讀み方に安易に準據して人間感情の表出を探ろうとするのは誤りである」(241頁17行〜18行)という批判を受けたという。さらに、西上氏が樗牛「支那文學の價值」(『太陽』明治三十年九月)に看取する、「中國の小説戯曲ではどのような表現が試みられているのかよりも、どのような書き手が生み出したものなのかの方が重要な問題だった」(247頁3行〜4行)という考え方に象徴されるように、これらの批判には、中國の文學は歴史的遺物として以上の價值はなく、同時代的意義はないとする國民文學派の小説觀が認められるのである(246頁4行)。

以上が、笹川『小史』が外部とどのように関わっていたのかについての考察だった。ここで、「はじめに」で述べられた西上氏の「彼のそうした企てはいかなる反響を得」(226頁3行)たのかという問いへの回答が得られた。

「四 『小史』以後」では、笹川の漢文學から日本文明史への研究領域の移行にともなう、研究方法の變化を見、胡適

『白話文學史』との比較から、笹川の漢文學に對する研究方法の根本的な問題點を浮き彫りにする。

國史科出身の笹川にとって、本業に専念するようになったともいえる日本文明史分野での研究では、人情世態（あるいは學藝風俗）を描出するということには、『小史』の頃と通底する研究目的であるが、最大の相違は、小説戲曲を仲介とした間接的手法に頼ることなく、現在と對置できる文化の實相を歴史的事實として丹念にかつ直截に見て取ろうとする比較文明的探求という研究方法を取ようになったことである（248頁1行～5行・同頁15行～16行）。これで、西上氏が「はじめに」で提出した「彼の知的探求の進路はどんなふうに移り變つていったのか」（226頁3行～4行）という問いについても、その回答が得られた。

笹川『小史』の構想は、當時においては失敗したといつてよいだろう。ならば、今日的視點から見ても、笹川『小史』の失敗の原因はどこに求められるであろうか。西上氏は、次のような回答をする。『小史』では、「文學作品を構成する言語に關わる考察が脱落していたのに注意すべきである」と考える。笹川の考察には、人間的感情はいかなる過程を経て言語が表出しようとするものとなるのか、それについての配慮が抜け落ちていたのではないか（251頁15行～17行）と。西上氏自身からのこのような問題提起をより明確にする目的で、「中國の文學の變遷における言語と人間の感情との關わり方に注目しようとした試みの一つとして」（251頁18行）の胡適『白話文學史』と『小史』との比較を試みる。兩者の差異は、西上氏の次のことばに集約できる。「胡適は、『白話』の概念を持ち出すことによって、小説ジャンルの作品のみを対象とするような文學觀から離脱する。彼が『白話文學』として扱おうとする對象は、……中國の文學で中核をなす傳統的詩文にも波及する。傳統的な詩文作品を考慮外におき人情世態を性急に追跡しようとした笹川『小史』との差異は、先ずこのような表現媒體への顧慮から生じたといえるだろう」（252頁15行～18行）。つまり、文學作品を意圖的にジャンル分けすることによって設けた小説戲曲という文學ジャンルのみを對象とする笹川『小史』の文學觀には、必然的に

限界があったというのが西上氏の笹川『小史』に對する一つの評價である。

では、西上氏のこのような言語と人間感情との關係に注目した胡適『白話文學史』の構想は成功を収めたのであろうか。答えは否である。

笹川とは一線を畫するかに見える胡適は、「模倣を重ねた表現ではなく、卑近ではあっても活きた人間感情を表現している」と自ら認める作品のみを追跡しようとする」(253頁7行〜8行)立場に立っていた。が、その行き着く先は、「胡適の『白話文學史』は、……使い古された文學的手法とそれにとってかわるべき新しい手法の對立の構圖を、文學史の領域に持ち込むことによって、これまでになかった文學の歴史の定式(陳平原「胡適的文學史研究」(王遙主編『中國文學研究現代化進程』一九九六年、北京大學出版社、所收)のいう「複線的文學史觀」)を、打ち立てることに一應成功しているように見える。しかし、胡適がいう「生氣」や「人間味」の追求は、『白話文學史』ではしばしば表現主體の出自、歴史的環境の考證にすり替わってしまっている」(254頁15行〜255頁1行)のである。すると、西上氏は、胡適『白話文學史』に見える文學史觀とは、「文學史とは歴史の一部分と見なす古くからある文學史觀へと回歸してしまっている」(255頁4行〜5行)ともいえるとする。

『白話文學史』のこうした敘述のゆらぎからは、先行する文學様式のそのものの模倣と、現實を言葉で描寫することとの間に本質的な差異を設ける考え方自體に、そもそも限界があったのではないかという疑念さえ生じてくる。結局、これまでに指摘されたことがあったように、胡適『白話文學史』の文學史觀も總體として見れば、やはり笹川『小史』と同じく、文學とは人の情感と思想の表出であり、それは特定の歴史編成から説明しきることができると考えられているのだと總括することができるだろう(戴燕「中國文學史——一箇歴史主義的神話」、『文學評論』一九九八年五期、參照)(255頁6行〜11行)、というのが胡適『白話文學史』に對する一つの評價である。

最後のことばが、本書の中に配された一つの章として西上氏が最も述べたかったことであろう。「手法を明らかに異にしながらも、中國の文學の變遷に對して笹川種郎と胡適の兩者が共に認識することなかつた事實は、表現類型が差異を持ちつつ反復されてきたことではないだろうか。模倣の反復、それこそ中國における文學的營爲の中核をなす部分だったのであって、後世の讀み手には一見書き手の眞情が表象されているように受けとられるのは、その中の偶然にしてかつ特異なケースに過ぎないのだと考えることはできないか。とするならば、笹川『小史』や胡適『白話文學史』が依據した記述の枠組みでは、中國の文學の移り變わりを捉えることはできない、ということになるのだろうか」(255頁12行～17行)。

大局的に見れば、笹川『小史』は、文學觀としては逍遙の近代的小説觀に支えられ、馬琴の勸善懲惡主義的小説觀に對し、風土決定論的文學史觀を示していた。しかし、笹川『小史』に逍遙の近代的小説觀は、「國民文學」派の文學を國粹主義的文明史觀の中で捉える文學史觀に壓倒され、笹川自身、比較文明史的角度から日本文明史を研究するも、同様の方法をもって中國の小説戲曲を再度論じることがついになかつたのである。

三

本節では、この西上氏の論考について、卑見を二點述べてみたい。

西上氏の論考には、いくつかの文學觀あるいは文學史觀が取り上げられているのは先に見た通りである。笹川『小史』などに見える風土決定論的文學史觀、曲亭馬琴の『水滸傳』解釋に見られる勸善懲惡主義的小説觀、笹川『小史』を支持していた坪内逍遙の近代的小説觀、「國民文學」派の主張する國家主義的文學史觀、胡適『白話文學史』に見られる文

學觀など、日本と中國におけるこの百年間に見られた文學に對する考え方を、具體例を挙げながら論じている。この論考を一讀しただけで、中國文學に對する考え方は、日本と中國におけるこの百年でさまざまな變遷を遂げて現在にいたっていることが讀み取れるであろう。そして、私たちはこうした變遷を経た後に立っていることを考えると、自らの中國文學に對する考え方を顧みざるを得ないのではないだろうか。一體、自分はこれまでに存在した文學觀あるいは文學史觀とはどのような關係にあつて中國文學と向き合っているのか。または、それらとはまったく違った見地から中國文學と向き合っているのか。そうした中國文學と向き合っている自分を位置づける意味で、本章は『中國の文學史觀』と題された本書において、とりわけ考えさせられることの多い論考ではないだろうか。

次に、このようにいくつかの文學觀・文學史觀に對する考え方が取り上げられている中で述べられる西上氏のそれらに對する評價を見てみたい。

西上氏が、本論考の結論として、「笹川『小史』や胡適『白話文學史』が依據した記述の枠組みでは、中國の文學の移り變わりを捉えることはできない」（255頁15行～16行）とした、笹川・胡適の兩者に對する評價を、それぞれ逆算的にさかのぼって考えてみると、西上氏が新たな文學史觀を構想するための立脚點が浮かび上がってくる。

笹川『小史』の基づく考え方は、風土決定論的文學史觀と人間的感情の自然な發露を最重要視する坪内逍遙の近代的小説觀であつた。一方、胡適『白話文學史』が依つて立つ考え方も、言語と人間的感情に注意を拂つてはいたが、結果的には、人間的感情の自然な發露を最重要視する坪内・笹川の小説觀に包括されてしまうものであり、最重要視したはずの人間の感情も表現主體の出自や歴史的環境の考證にすり替えられ、文學史とは歴史の一部分（255頁4行～5行。西上氏のことばを借りて、換言すれば、「文學を文明史の一部」230頁14行）だとする文學史觀に還元されてしまっている。兩者のこのような文學觀・文學史觀に對して、西上氏は「笹川『小史』や胡適『白話文學史』が依據した記述の枠組み

では、中國の文學の移り變わりを捉えることはできない」(255頁15行〜16行)としているのである。

これらのことを踏まえて、本論考の隨所に見られるさまざまな文學觀・文學史觀に對する西上氏の評價を見ると、風土決定論的文學史觀を、「文學を文明史の一門と見なす廣義の文學觀は、現在の日本において、ことに中國學の領域ではとりわけ強固に繼承されているのではなからうか。實用的なる北方文明が生んだ文學的營みが、情感的な南方文明や外來文明の影響を被って、様々な變容を重ねてきたのが、他ならぬ中國文學の歴史だ、という考え方が細部でこそ數々の修正を受けることはあれ、今日でもなお有力な中國文學史觀の一つであり続けているように思われる」(230頁14行〜18行)とし、近代的小説觀に對しても、「何世紀も前の小説戲曲ジャンルの文學を通じて、……文學からその外部に存在したであろう民俗や世態を窺うことを目的とする研究は、現在でも普遍的に行われている。また、民俗や世態の解明から、小説戲曲作品の讀解に新たな光が投げかけられることもある。そうした意味では、笹川が人情の探求から、中國の俗文學とも言うべき小説戲曲の變遷を明らかにしようとしたことにも一定の意義があったと考えられる。だが、笹川種郎が自著の改訂を期しながら、結局それを果たすことができなかつたのは、同時代日本の或いは西歐の近代文化を基準として設定するあまり、作品を通して觀察できる事實を偏ってみようとしていたためではないか」(251頁9行〜17行)としている。

西上氏の笹川『小史』や胡適『白話文學史』から導き出された風土決定論的文學史觀、近代的小説觀に對するこれらの評價は現在でも盛んに行われているこのような文學觀・文學史觀には、すでに限界があると論斷しているように評者には受け取れる。すなわち、現在の中國文學研究の一側面に對して、一つの限界を突きつけているように感じるのである。

そこで、西上氏は、人間的感情を表現する言語にもっと關心を寄せるべきだろうという提言をする。この提言も逆説

的に捉えれば、これまでの文學觀や文學史觀には、文學そのものを構成する言語に對する考察が不十分であつたということがいえるのではないだろうか。文學作品の成立する最低の條件の一つとして、あるいは「文學」作品とは限定せず、言語を通して表出された「書かれたもの」と研究對象として捉える限りにおいて、言語へ最大限の關心を寄せるところとは、不可避なことであり、至上命題といつても過言ではないであろう。中國文學研究を志す者にとって、この西上氏の提言は、極めて有意義なことだと思ふ。

四

以上、「第八章 西上勝著「人情の探求と小説史の構築——笹川種郎著『支那小説戯曲小史』をめぐって——」についての要約、および書評を行った。

繰り返しになるが、本論考は、ここ約百年間に見られた文學觀・文學史觀の變遷を、笹川『支那小説戯曲小史』を軸に概觀し、それらの不十分さを補うためには、言語に對してこれまで以上に注目すべきことを主張するものであつた。

先に引いた西上氏の最後のことばにある、中國における文學的營爲の中核である模倣の反復を説明すること（255頁12行〜17行）については、今後の西上氏の解答を切に期待したい。

第九章 陳國球著「林庚『中國文學史』を探る」

三枝秀子評

一

以下において、第九章「林庚『中國文學史』を探る」(257～292頁)の要約を行う。

この章の執筆者陳國球氏は、林庚氏の著した『中國文學史』を解説した。『中國文學史』は一九四七年に完成し、そして一九五四年には修正されて『中國文學簡史』となり、やがて一九九五年には完全な『中國文學簡史』となった。陳氏は『中國文學史』に見える林氏の西洋文學に對するコンプレックスが、後の『中國文學簡史』には見えなくなっていたことに注目しながら『中國文學史』を紐解いてゆく。

以下、テキストの順を追って、節ごとに執筆者陳氏の主張をまとめ、その後に議論を展開したい。

二

陳氏は、一、林庚『中國文學史』の論述の骨組み。二、『中國文學史』の論述の基點。三、「驚きの精神」。四、「物語的構成」。五、結び。の順序にしたがい『中國文學史』を紹介する。以下、詳細に見ていこう。

第一節「林庚『中國文學史』の論述の骨組み」

ここで陳氏は、『中國文學史』の構成について論じる。

『中國文學史』は全三十六章からなり、太古の文學から新文學運動以前までの中國文學の歴史を「啓蒙の時代」「黄金の時代」「銀の時代」「闇夜の時代」と四段階に分けている（258頁9行）。「詩的」な中國文學が、目覺め、發展し最高のものになり、やがては衰え、ついに「物語文學」へと變わっていった、その變換をこの四段階は表している。この名稱は、古代のギリシャ・ローマの神話から借用したものである（258頁10行）。それは「この宇宙が人間性の惡化や文化的衰退の過程を一度經た」という西洋の「神話の虚構」に基づいている（258頁12行）のだと陳氏はいう。だが、西洋の「神話の虚構」と中國の文學とは異なる。中國の文學は「闇夜の時代」で簡單には終わらない。「中國文學史」の外から差し込んでくる曙の光——新文學運動に對し願望や期待を抱くことになるだろう」と陳氏は林氏の見解を分析するのであった（262頁2行）。

2

第二節『中國文學史』の論述の基點」

ここでは、林氏の論述のポイントが三點紹介されている。

- 1 「文化的缺乏」コンプレックス（262頁）——中國文學には「劇的」な物語や敘事詩がない
- 2 言葉と文字の斷絶（263頁）——西洋は話した言葉がそのまま文章になるが、中國では文語と口語とが異なる
- 3 「女性」？「男性」？（265頁）——『詩經』を「女性的」とし、『楚辭』を「男性的」とすること

この三點のポイントは、「中國が西洋の衝撃を受けた後、自國の文化に對して自信を失ってしまった心情の表れ」（266頁

10行)であると陳氏は分析する。

林氏が中國文學を『楚辭』に端を發する男性的なもの(266-267頁)とするところに、陳氏は林氏の中國文學に對する異質な見解をみる。そして、陳氏は、その「男性的」な「若者の精神」について、節をあらため、第三節にそれを論じていく。

3

第三節「驚きの精神」

ここで陳氏は、林氏の「若者の精神」という異質な觀點から、『詩經』『楚辭』そして『唐詩』までの文學を裁斷する。林氏は、中國文學の中に西洋的な力強い男らしさを求めた。それゆえに、中國の最古の文學である『詩經』は中國の詩歌の始祖にはならなかった。なぜなら、『詩經』は女性的特徴を備えたものであり、そこには生活の楽しみが満ち、自我を缺いていたからであった(270頁)。一方、『楚辭』には、若者が自我に目覺める「驚きの精神」が詠まれている。それには男性的特徴である「驚き」「悲哀」「苦悶」の感情が見られた(271頁)。まさにそれは、林氏が見た西洋文學の内容的な特徴であったと陳氏は分析する。また、それだけでなく、『楚辭』には西洋の物語的な體裁の特徴も見る事ができた。林氏は『楚辭』を「散文に由來するもので、散文と詩とは相對する存在である」と考えたのだと陳氏はいう(272頁)。

陳氏は、林氏が唐詩の中に「若者の精神」を探し求めた結果、林氏は傳統的な讀解とは異なる中國の文學史の讀み方をすることになったのではないかという(275頁)。

その異質さは、まず王維を「詩壇の眞の主導者」としたことであると陳氏はいう(275頁)。林氏は王維の詩の中に「異國の情緒、ロマンティックな氣質」を探しもとめ、それを「若者の心情の現れ」であるとした(275頁)。王維の詩風は

まさに林氏の求める西洋文學の特徴なのであった。

そしてつぎは、杜甫に對する傳統的な文學詩論に反したことである。杜甫は林氏好みの「若者の精神」からかけ離れていたこと、「表現形式の典型を定め」、「技巧の發展を切り開い」たために、林氏は杜甫を「中國詩歌發展の凋落を招いた根源」と見なしたのではないか、と陳氏はいう(279頁)。

4

第四節 「物語的構成」

ここでは、中國文學に悲劇のない原因を説明している。

林氏は中國文學史の中心は詩歌であると強調してきたが、宋元以後の文壇の主役は小説や戯曲であるという定説を受け入れていた(280頁)。そして、詩歌の衰退以降、詩歌の「簡潔な言葉で言い盡くせない意味を表現する」という力の凝縮は、「物語的な構成の上」に表れたのだと陳氏は林氏を理解する(280頁)。

中國には西洋のような悲劇的な物語が存在しないことは林氏にとってなによりのコンプレックスであった。だがそれを林氏は「夢の構造」により解消しようとした。「夢の構造」とは、「夢」という比喻により「物語的な構成」を表そうとすることである(282頁)。これは單なるコンプレックスに留まらず、中國文學の中の全ての敘事的文體が共有する本質に適用することができる(282頁)と陳氏はいう。そして、さらに陳氏は林氏の言葉を借り「西洋の敘事文學は生命と構造を同じくするのに對し、中國の敘事文學は生活の外にある空想の世界である(三二二五頁)」と陳氏は説明する(282頁)。

林氏によると、西洋の敘事文學は「悲劇の構造」で、中國は「夢の構造」という違いがあるということである。そして西洋の「悲劇の構造」は、自らがその中に陥ってしまい、抜け出すことができない運命を指向するのだが、中國の

「夢の構造」は離れた所から「静視」し「楽しむ」ものである（283頁）、と陳氏は林氏の主張を解説する。

林氏は「夢の構造」以外に『西遊記』に見える「童話の精神」について注目する（285頁）この「童話の精神」は「若者の精神」の「變奏」であり、「彼が追い求めてきた文學史上の「活力」の一つでもあるだろう」と陳氏は見ている（286頁1行）。

5

第五節「結び」

この『中國文學史』は林氏の「獨特な眼光と、普通とは異なる著述方式により、二度と現れることのない様な素晴らしい文學史論を完成した」（286頁11行）、と陳氏はいう。「二度と現れることのない」と言うのは、林氏は『中國文學史』を『中國文學簡史』に書き改め、それは「正規の傳統的文學史のモデル」¹になっているからである（286頁11行〜13行）。

この『中國文學史』の優れているところは、「新奇な構成や綺麗な言葉遣い」と「讀者の參與を促そうと手招きしているテキスト」であるところにある（286頁15行）と陳氏は最後に締めくくる。

第九章の要約は以上である。

三

『中國の文學史觀』の「あとがき」で川合康三氏は、「私たちの研究がいわば、「近代への懷疑」から出發しているのに對して、中國においては二十世紀の總括として（西歐的文學史を―三枝補）肯定的に捉えられている」（325頁）と述

べている。今の中國が川合氏のこのような状況であるのなら、陳氏は何故「正規の傳統的文學史のモデル」に書き改められた『中國文學簡史』ではなく、この『中國文學史』を選んだのだろうか。

陳氏は林氏の「獨特な眼光」により著されたこの『中國文學史』について論じる際に「東洋或いは中國文學のあり方」(284頁3行)、「中國式のやり方」(286頁5行)という表現を用いている。このことから推測すると、陳氏は『中國文學史』には西洋の近代的な文學史觀にはない中國式の文學史觀が見えることを我々に示そうとしていると考えることが妥當のようだ。だが、陳氏自身がそのどちらを評價するのか、どちらを選ぶのかについては述べてはいない。

林氏は二〇〇〇年のインタビューにおいて、「中國の文學傳統は「劇的」ではなく「詩的」である」、そして「中國はやはり詩の國家」である(257頁)、と斷言した。それは林氏の『中國文學史』から『中國文學簡史』にまで一貫する主張である(258頁)。だが、一九四七年と、二〇〇〇年とはトーンに高低の差が見られる。というのは、『中國文學史』を表した一九四七年の時には、なぜ、中國には詩しかないのだろうか、という「文化的缺乏」コンプレックスから、中國の文學傳統を「詩的」であると認めざるを得なかったからである。

その「文化的缺乏」コンプレックスを解消するために、中國文學の中からその「補填」となるものを林氏は求めた。それが、結局は、中國文學の本質ではない異質さとなり、この著書に見えるのである。それを陳氏は「『中國文學史の論述』の基點」として三點あげていた。(262頁268頁)

陳氏によると、『中國文學史』は、文學の歴史を林氏のコンプレックスという極めて個人的な主觀とひらめきにより書かれたものとしている。そして、一方の、書き改められた『中國文學簡史』にはそのコンプレックスは見られず、「正規の傳統的文學史のモデル」を襲うものとなっているということである(286頁13頁14行₂)。ということから『中國文

『學史』は「東洋的」、そして『中國文學簡史』は「西洋的」と見なしうるようだ。

報告者は、林氏の極めて個人的な主観とひらめきをはたして「中國的」と言っているのだろうかと疑問を感じずにはおれない。なぜなら、この林氏の主観は西洋に對するコンプレックスから生まれたものにすぎず、結局のところ、その主観も西洋の文學史觀から離れられずにいるのではないかと考えるからである。

そもそも「中國的」「西洋的」とは一體何なのだろうか。陳氏の思考のなかでは少なくとも「西洋的文學史」というものが明白な形となって存在しているようである。そして、その「西洋的文學史」とは異質のものつまりそれを「中國的文學史」として林氏の『中國文學史』を陳氏はここにとりあげ紹介したのであることが推測される。しかし、本體の『中國の文學史觀』においては「西洋的文學史」は明らかにされていない。それだけでなく陳氏の論述においても明らかに述べられてはいない。読者はやはり「西洋的文學史」をぼんやりと想像するしかないのだ。

報告者は、陳氏が『中國文學簡史』ではなく『中國文學史』をここに取りあげ紹介した理由を二通り用意した。

まず、一つ。陳氏は「西洋的文學史」とは異なる「中國的文學史」を紹介しようとした。それが林氏の『中國文學史』であった。この林氏の『中國文學史』は、これから將來我々が模索するであろう「新しい時代の文學史」を創造する一助となろうと考えているのではないだろうか。

二つ、近代化が進み、西洋と自國との文化の差が見えなくありつつある今日の中國においては、林氏の『中國文學史』を超えられる文學史はもう二度と中國に生まれまいであろう、と覺醒させようとしているのではないか。

なるほど、陳氏のいうとおり林氏の『中國文學史』は「讀者の參與を促そうと手招き」をするテキストである（286頁15行）。だが、『中國文學史』は林氏の北京大學の圖書館にも所藏されていない³⁾。實際に見ることが叶わない。とすれば陳氏は自身のスタンスを詳細に明示すべきである報告者は考える。

- (1) この正規のモデルとは、つまり「文學の發達を詳かに」時代の順序に記された「文學史」のことと一應理解した。
- (2) 『中國文學簡史』には、四つの段階は見えず、第一章から第三十二章まで中國の歴史に添いつつ、その特色を述べている。
- (3) 二〇〇二年七月、北京大學に留學していた鈴木拓也氏に調査していただいた。

第十章 戴燕著「民間」から「人民」へ——『中國文學史』上の正統論——

關久美子評

一

この第十章は、「中華人民共和國成立後、文學史がその時時の政治状況と深く関わりながら變轉していくありさまを、中國文學の正統をめぐる議論を中心として追跡(327頁)」したものである。

ここでは、戴燕氏のおこなった「追跡」をさらに順を追ってまとめたいので、氏の觀點について検討を試みる。

二

本章は、新中國成立直後に交わされた文學史に関する議論のようすを、五つの節に分けて記している。さらに第五節の最終段落では、本章全體のまとめとして、當時の文學史觀に對する戴氏の見解が述べられている。以下、各節ごとに内容を要約する。

一 「民間」こそ人民の主體：一九五〇年四月、蔣祖怡の『中國人民文學史』が出版された。同書は、建國後初めて正式に出版された中國文學史である(293頁)。新中國のために書くべきは、當時「人民文學史において他に無かった」

のだと戴氏は述べる（294頁）。蔣祖怡のいう「人民文學史」とは、口語文學の歴史であり、『詩經』や『楚辭』をはじめとするかつての正統文學は、本来人民文學の一支流に過ぎないという（295頁）。そして、人民大衆の文學こそがすべての文學の根源であり（295頁）、今後は民間口傳文學を中國文學史の「正統」とするのだと蔣祖怡は主張した（296頁）。

二 舊文學の文人もまた人民の一部：だが、實際に「人民、とりわけ工農兵のために奉仕する文藝」政策に直面して、多くの人々はひどく當惑する。「人民文學」の中に、プチ・ブルを書くことや傳統文學の形式が含まれるか否かをめぐり、一九四九年の夏以降、議論が交わされるようになる（299～300頁）。その結果、前者は當時の政策から外れると見なされ否定される（299頁）。後者については、「文藝講話」あるいは毛澤東自身が詩作をおこなっていたことなどを論據に、古い文學形式であっても「人民らしさを持った内容とリアリズムの表現方法」については學んでもよいとされた（301～303頁）。

三 「人民＝民間」の否定：『中國人民文學史』は、一九五一年四月に第二版が出版されるや、北京をはじめとする各方面から批判を受ける（304頁）。蔡儀の書評によれば、蔣祖怡はマルクス主義の觀點から文學史をとらえたというが、「民間文學」＝「人民文學」とするのは、單なる形式主義の觀點にすぎず、眞のマルクス主義文學史家ならば、歴代の文學者の作品の中からも「人民性」を見いだして評價すべきだという（305頁）。これに對し、蔣祖怡はすぐさま反省の辯を表明したが、その後も長い間批判の的となった（306頁）。

四 民間文學にふさわしい位置：新中國成立以後、毛澤東の「新民主主義論」が新たな政治指針となると、新文學の特性も「新民主主義の文學」であると規定され、新民主主義革命の現實を反映した、リアリズム文學が新文學の主流となった。このような文學觀は傳統文學を認識する上での尺度にもなり、古典文學においても、その人民性やリアリズムが評價されるようになる（310頁）。これに伴い、民間文學は中國文學の主流ではないとの意識が高まり、「正統」の座か

ら一轉、再び周縁に追いやられる(311〜312頁)。

五 愛國主義と文學史：五十年代初期、愛國主義が提唱されると、「愛國」は古典文學を受容する目的や動機となつたばかりでなく、文學を評價する際の基準にもなった(314頁)。また、ソ連作家協會のファジューエフから中國古典文學に對する稱贊を得たり(313頁)、屈原を記念する世界規模の活動がおこなわれたこともあり、文化面における中國の世界的地位や、傳統文化が現代國家において果たす役割などが見直されることとなった。新しい國際政治文化の情勢に對應すべく、傳統文化を扱う態度や政策の調整を急ぐという問題を、文學史の編纂の中で考えた場合、民間文學と文人文學の關係をどのように處理し、中國文學史の「正統」をどのように確立するかが鍵であると、戴氏は述べている(316頁)。

最後に戴氏は、文學史は往々にして一つの國家の精神史を映し出すものであり、一九四九年以後の「中國文學史」編纂は、そこから更に踏み込んだものであると總括する。さらに、文學の「正統」について、「永遠に不朽の藝術作品は人類全體にとっての文學上の財産を充實させ、我々民族のために大きな榮譽を勝ち取ってくれる」ことを理解していれば、文學史の主流や正統に關して再び疑問がわくことはない、と自らの見解を述べて結んでいる(317頁)。

三

先にも述べたように、第五節の最終段落が主に戴氏の見解が述べられている部分である。この中で、時の政局に左右されて揺れ動く建國當時の文學史觀について、氏は「文學史は往々にして一つの國家の精神史を映し出す(317頁)」ものだと總括している。また、本章の副題にもなっている文學史の「正統」について、自らの見解を述べている。このよ

うな戴氏の視點は、川合氏や本書の意圖するところと果たして合致しているのだろうか。

四

本書の編者である川合康三氏は、第一章で近代の歴史觀によってそれ以前の時代を扱うことの問題點を述べる中で、「中國の傳統的詩文は士大夫階層によって擔われたものであるから、市民・庶民中心の價值基準を無理に押しつけて判斷してみても不毛な結果に終わるほかない。中國で政治イデオロギーが學術をも支配し、『人民』への貢獻度を基準にして文學の價值が決められていた狀況はその極端な例であろう」（9頁）と指摘している。本章はまさにその具體的な例示と言えよう。マルクス主義という西洋近代思想の枠に傳統文學を無理やりあてはめたがために生じた問題や、不毛な議論のさまが、詳細に記されている。だが、戴氏自身は果たしてそのような意識の下にこの第十章を書いたのだろうか。

戴氏は「文學史は往々にして一つの國家の精神史を映し出す」ものであると述べているが、本章に記されている文學史觀の變轉についても、當時の國家精神を反映した結果として捉えるだけに終わっているように思われる。川合氏のよ
うに、近代的な思想によって文學史を扱うことを問題視するような記述は見あたらない。

また、戴氏は「中國文學史の主流、或いは正統とは何であろうか」といい、自らその見解を述べ、「文學史の主流や正統に關して再び疑問がわくことはない」ということばで締めくくっている。この言に象徴されるように、氏の論調からは、建國當初のように政治イデオロギーに左右されない現代ならば、「文學史の正統」について正しい判斷を下すことができる、戴氏自身は考えているものと讀みとれる。だが、果たしてそうなのだろうか。

さらに、そもそも「正統」というものを絶対視し、そこに作家なり作品なりをあてはめて考える戴氏の視點は、近代的視點そのものではなからうか。

つまり、戴氏は近代的な文學史觀を問題視していないばかりか、自らがその近代的視點から文學史を捉えているといえるのである。そうだとすると、「文學史研究における『近代への懷疑』という視點」を旨とする本書の意圖からは、はずれることとなる。

五

本章は、マルクス主義という西洋近代思想の枠に傳統文學の歴史を無理やりあてはめたことにより生じた問題についての、具體的な例示としては評價に値するだろう。だが、戴燕氏自身にそのような意識があつたかどうかは疑問である。また、文學史觀に對する戴氏の見解そのものもまた、「近代的」な視點にはかならず、西歐近代が作り出した概念からの脱却を圖ろうとする本書の主旨（少なくとも川合氏の意圖）からは、ずれているように思われる。川合氏があとがきで「私たちの研究がいわば『近代への懷疑』から出發しているのに對して、中國においては二十世紀の總括として肯定的に捉えられているなど、基本的な態度に興味深い相違が横たわっているかに思われた（325頁）」と述べているのも、おそらくこのあたりを指しているのではなからうか。